

下河辺淳アーカイヴス
Archives Report

追 憶
—異彩のプランナー 下河辺淳氏を偲ぶ—

Vol.13

はじめに

～下河辺淳アーカイヴス レポートについて～

一般財団法人日本開発構想研究所は、2008〔平成 20〕年 1 月に「下河辺淳アーカイヴス」を開設いたしました。このアーカイヴスは、下河辺淳氏の約 60 年にわたる諸活動の記録であるとともに、日本における戦後史の一端を垣間見ることができる貴重な資料群でもあります。また下河辺氏が別途保管していた戦後の国土計画に関連する資料群については、2013〔平成 25〕年 6 月に、新たに「戦後国土計画関連資料アーカイヴス」として開設いたしました。

“時代のプランナー”とも称された下河辺氏のこうした資料について、多くの皆様にご活用いただき、さらにこのアーカイヴスを充実させるために、2009〔平成 21〕年よりアーカイヴスレポートを発刊しています。

本号は、昨年 8 月 13 日に永眠された下河辺淳氏を偲び、「追憶―異彩のプランナー 下河辺淳氏を偲ぶ―」と題し、各分野で下河辺氏と親交を深められた女性の皆様に追悼文を寄稿していただき、下河辺千穂子夫人にもメッセージを寄せていただきました。

下河辺氏の著作を紹介する「Key Information」では、国土計画・国土行政以外の分野における小論やインタビュー、発言記録などを掲載しました。そのアイデアの源泉やユニークな発想の一端にふれていただければ幸いです。なお本稿の挿絵は、1999〔平成 11〕年 1 月～2000〔平成 12〕年 3 月まで『週刊文春』に連載された「飛耳長目の下河辺淳が語る―非常識私論」でイラストを担当された LUCY こと紺野早苗さんの作品です。

また、「下河辺淳アーカイヴスについて」ではその設立経緯と概要を取りまとめるとともに、「Archives News」では昨年 6 月に沖縄県公文書館に寄贈した「下河辺淳沖縄関係資料」が同館にて公開されたニュースを紹介いたします。

本レポートを、皆様の研究活動等の一助としてご活用いただければ幸いです。

2017〔平成 29〕年 6 月

一般財団法人日本開発構想研究所
「下河辺淳アーカイヴス」

一般財団法人日本開発構想研究所は、くにつくりから、まちづくり、ひとづくりまで、活力に満ちた明日の社会の形成に役立つ学際的な研究調査を、人と人とのふれ合いを大切に、地道に進めるために 1972〔昭和 47〕年 7 月に設立された研究機関です。

そのため、多彩な研究者からなる内部スタッフを擁し、必要に応じて外部専門家の協力を得つつ総合的かつ実践的な研究を行うシンクタンクとしての歩みを進めています。

目 次

追憶—異彩のプランナー 下河辺淳氏を偲ぶ— 3

木幡 和枝 (芸術評論家／東京芸術大学美術学部名誉教授)

今野 由梨 (ダイヤル・サービス株式会社代表取締役)

近藤 共子 (アジア防災センター所長)

高島由美子 (下河辺淳秘書)

富田 玲子 (建築家／象設計集団)

中村 桂子 (JT 生命誌研究館館長)

日根野真弓 (オフィス日根野代表)

比屋根米子 (元那覇市職員)

藤田 桂子 (東京海上日動火災保険株式会社北東京支店長)

下河辺千穂子

Key Information 17

植物的都市から鉱物的都市へ

人間のリズムと社会

深夜の三時間が情報収集の勝負、深い眠りがア「異」デアを引き出す

森とむらへの思い

これからの地図

中学時代を想う

魂の入ったお金

国籍や年齢などを超えた知的交流—情報のネットワークをめぐって—

私の楽観主義—プラス思考をめぐって—

日本のデザインを考える

司馬さんの「土地公有論」を考える—司馬さんが求めていたのは、“野人の公”ではなかったか—

光齢化社会

私の考える人口問題

「下河辺淳アーカイヴス」について 42

島津千登世 (「下河辺淳アーカイヴス」担当アーキビスト)

Archives News 49

「下河辺文書」が沖縄県公文書館にて公開されました

追 憶

—異彩のプランナー 下河辺淳氏を偲ぶ—



複雑に絡み合う関係性を貫いて本質に手を伸ばす

木幡和枝（アート・プロデューサー、東京芸術大学名誉教授）

下河辺さんに初めてお目にかかったのは 1982 [昭和 57] 年のことだった。その後、国際的、国家的な規模のプロジェクトから、山間部の小規模な自治体、はては数名グループの実験的、試行的な活動に至るまで、先端科学から国際政治、行政、生活、文化芸術の分野でじつに多様な活動をご一緒できたことは、どのような神の配剤だったのか、僥倖としか言いようがない。

私は、一編集者として哲学、芸術、文化、科学を論じる独立雑誌や単行本の制作と普及にかかわり、執筆や翻訳を行い、国際的なインタビューを重ね、万博や同規模のイベントの企画や運営に携わるいっぽうで、まったく私的な場で、先端芸術の発表の場を音楽家、舞踊家、美術家、また科学者との協働関係のなかで国際的に展開していた。それが、もうひとつの私のプロとしての顔、同時通訳者、国連などの国際機関の会議や関連文書の制作者としての面がカナメとなったのか、縁（えにし）あって、1985 [昭和 60] 年に筑波で開催予定だった、国際科学技術博覧会の体制作りの渦中だった下河辺さんに紹介された。その後は、総合研究開発機構（NIRA）の理事長としての下河辺さんの国際的な対話、会議、交流、海外出張の際の通訳として、広範な分野、地域、人脈に触れる機会をいただいた。

何よりも驚かされ、23 年も齢下の私がしばしば感銘を受け、そこから深く学ぶことになったのは、その旺盛な好奇心であり、その根底にあった際限のない知性だ。ワシントン DC であれ、ニューヨークであれ、カイロであれ、若者たちや少数者、前衛をいく人々が何をしているのか、どんな場所（アジト）を作っているのか、足を踏み入れては、すぐに同化していった。「戦後は、長靴ばかりで、お酒もガンガン吞んで、困窮者や居場所のない連中のことを見てきた」と語る姿には、私が生まれた頃の荒廃した日本、東京の復興推進の生命力が溢れていた。

あるときワシントンで、アメリカの国際政治・課題の専門家たちとの一週間にわたる会議が行われ、その前夜祭の共同主催者挨拶で、「私はアメリカ合衆国を憎んでいます」と口火をきった下河辺さん。経験の浅い通訳なら、逃げ出したくなる難関だ。東京大学建築学科在学中、原爆投下直後の広島に高山英華のもとから被害調査に派遣された際に見たことを語る。それは立場を超えて、破壊に対する憎しみを全員に植え付けた。この開幕は、当面の政治経済、行政課題を論じる会議に深淵な共感と責任感という不動の地盤を与えた。

いつでも境界をまたぐ、複雑に絡み合う関係性を貫いて本質に手を伸ばす。その準備ができていた。80 年代半ばのこと。NIRA の研究交流という文脈で、当時まだ親密とは言えなかったイスラム世界との研究会議を、ヨルダン政府と共同で首都・アンマンで実現したときのこと。予想外ながら、微笑みたくなるようなことが起こった。各国の研究者、王族、政府関係の代表者との会議のあとエジプトのカイロに戻って、せめてナイル川かスエズ運河をちゃんと見よう

と、当時 NIRA の理事だったと思うが、同行されていた緒方貞子さんと 3 人で近くのイスマイリア市で観光船に乗った。観光客に混じって地元の人たちも多くひしめきあう甲板でのこと、胸までもない低い落下防止壁を越えて、地元の人が運河に落ちた。すぐさま何人かが飛び込んで救い上げようとするが、大きな体を素手で引っ張り上げるのは大変だ。そこで下河辺さん、私、緒方さんの順で互いを支え合い、必死の形相で大男を甲板に引っ張り上げた。「緒方さんの難民救済の仕事に少しは協力できたね」と嬉しそうに言うお茶目な下河辺さんの満面の笑みは忘れられない。

通訳や翻訳の技術面でのお手伝いから、考え方や企画に関連する世代や性別、立場を超えた意見交換へと、協力の中身は次第に広がり、下河辺さんはどんどん持ち前の芸術文化への関心を表にしてくるようになった。善悪や公私の凝り固まった枠組みではなく、無限に自由なはずの個人個人の感性の潜在力への期待だ。

1988 [昭和 63] 年、まったくの偶然だが、竹下政権が「ふるさと創生」、市区町村へのいわゆる「一億円交付」事業を打ち出した。それとは無関係に、作家の中上健次、美術家の榎倉康二、音楽プロデューサー田村光男、建築の象設計集団など、各分野の団塊の世代によって「白州・夏・フェスティバル」(後に「ダンス白州」と改称、1988 [昭和 63] 年から 2014 [平成 26] 年まで) が開始された。表現の故郷である農村を求めて 80 年代半ばから白州で「身体気象農場」を開き本拠地とした、舞踊家の田中泯の呼びかけに応えてのことだった。その一党の要請に応え、一も二もなく下河辺さんは推進会議の長となり、甲斐駒ヶ岳を登って何度も神社を訪ね、お祓いを受け、県庁や町役場、地元工場をもつサントリーの理解を求めて激論し、奔走して下さった。

4000 人余りの小村ながら名水を誇る現役農村で現代美術の野外展示、地域芸能や能など伝統芸能を特集し、ビッグネームから地域のお神楽、現代音楽やダンス、演劇の公演やワークショップを中心とした集合体だ。初回は 2 週間ほどの短期だったが、その後は夏の 2 カ月間続き、栗林のキャンプ場や民宿でときには何百人もが寝起きや鍛錬をし、山麓の神社で儀式や公演を行い、作物が育つ田畑や森のなかで厳しい自然環境にさらされた現代美術作品の制作が行われ、夏のみ、あるいは年間を通じて鑑賞者が来訪した。

数年ほど前、その最終回が夏ではなく初めて真冬の 2 月に行われた。すべてを終えて帰京する朝、下河辺さんが南アルプスを眺めながら言った。

「一度でも冬にやって良かった。皆さんは、あの雪山を見てくれたらうね」

「開発の御大」と呼ばれたと聞き、私のような者でも一抹の理解しがたい両面性への「疑問」を抱かざるを得なかった下河辺さんの笑みは、厳寒の雲ひとつない晴天にも負けない透き通った真っ直ぐなものだった。❖

—宣誓—

いただいた数知れぬお叱りを「光」に変えて次世代に継ぎます

今野由梨（ダイヤル・サービス株式会社代表取締役）

私どもダイヤル・サービス社員一同にとって、生涯忘れることのない恩人、下河辺先生との出会いは一風変わったものだった。

ある日、IBM の椎名武雄社長、野田一夫先生等に誘われて出たのが、下河辺先生の国土庁事務次官就任お祝いの会だった。会場を埋め尽す方々は、誰もが知る政財官界の著名人ばかり。いつもながら女は私一人。宴たけなわとなり、それではちょっと気分を変えてと、ステージに引っぱり上げられ、何か歌えといきなり私にマイクが渡された。いくら何でも、こんな無茶振りは経験したことない！

それと前後して、日本で最初のニュービジネス—電話を使った双方向電話サービスを手掛ける、しかも女性だけのダイヤル・サービス株式会社は、創業 10 周年を機に、女性だけのシンクタンク「生活科学研究所」を立ち上げた。起業しても 5 年生存率が 15% もない時代だったから、会社の 10 周年には特別な意味があった。毎日、全国からおびただしいコールを受けて、国の電話回線をパンクさせるほどに、人々は私たちのサービスを求めているのだ。そのビッグデータを新たな国造りに生かさねばと、「生活科学研究所」を立ち上げ、挨拶まわりの一環で下河辺理事長の総合研究開発機構（NIRA）を訪問した時のこと。

「え、あの時の歌手でしょ。その貴女がなぜ研究所の理事長なんかに？」それまで私は完全に歌手だと思われていたのだ。

出会いはお粗末だったが、全国から集めた選りすぐりの女性研究員たちは素晴らしかった。皆はすぐに下河辺理事長の弟子として、さまざまな研究チームに入れていただいて教えを受けた。当然、自分たちの会社の社長であり研究所の理事長である私と、下河辺先生との質的、人格的落差に気付き、いつの間にか下河辺門下生となって、私の存在感は薄れていった。それでも、他に民間女性不在ということでこの国で誰よりも多く国の審議会に出させられていた私を見かねてだったのか、ある日私は NIRA に呼び出された。

何ひとつ専門領域を持たない者が、果たすべき役割を考えること。今から逆立ちしても各審議会委員のレベルには届かない。だとしたら、一流の専門家（スペシャリスト）になろうとするのではなく、二流三流でいいから世の中の人々の代弁者、何でも屋（ゼネラリスト）を目指すのだと。内心「三流」という言葉に傷つきはしたが、その時「心」と「進路」は決まった。

今、「ベンチャーの母」として、「国境なきお母さん」として、どの国の、誰が、何をテーマに、どんな仕事、テクノロジーを持ち込んでこようと、私には関係ない、分からない、と追いつ返ししたりすることはしない。

下河辺先生から、三流でいい、今この時代に求められているのは、社会の隅々の想いや祈りを共有できる母のようなゼネラリストなのだと教えられなければ、「ベンチャーの母」も「国境なきお母さん」もあり得なかった。

この役割をいさぎよく引受けられるのは、もうひとつ、下河辺先生がご自身の生き様、私心の無い潔さを身近に見せて育ててくださったおかげだと思う。

その偉大な先生に何度か反抗したことがあった。そのひとつはお金に関することだ。

半世紀近く前に日本初のニュービジネスを立ち上げたが、何より苦しかったのはお金だった。1985〔昭和 60〕年「つくば科学技術博覧会」で基本構想委員、広報担当委員に起用されたのは、私たちにとって何よりの名誉だった。研究員総出で、何日もホテルに泊まり込んだ成果は評価され、また一段と社員の結束、成長につながり、むしろお金を払うべきは私ではないか、という思いもあった。しかし私は下河辺先生にあえて直訴した。社員の給料分払って下さい、と。本来、国中の企業が協力分担して開催するもので、一社だけにお金を払うことはできないという原則は分かっていた。答えは無かった。

様々な不利な条件を克服して、つくば博は成功した。私のもうひとつの役割、広報委員も地の利の悪さもあって最後まで難航した。私に課せられた 2000 万人動員を達成すべく、社員たちも知恵を絞った。わが社のサービスのひとつ、「子ども 110 番」にネット上の科学技術館を設けてその来館者も入場者にカウントするとか、「科学技術は誰のもの」というシンポジウムを各地で開催した分も含めるといった苦肉の策も最後の手段として持っていたが、その必要もなく、最後の日になんと見事来場者 2000 万人を達成した。そして知らぬ間に大会事務局から 100 万円が振り込まれていた。

思いっきり反抗した 2 つ目は、災害復興と原風景についてであった。

わがふるさと三重県の桑名市は 1959〔昭和 34〕年、伊勢湾台風に襲われた。私の心を育み癒してくれた原風景のすべてが高く厚いコンクリートの要塞と化していた。

東海道五十三次の名所、七里の渡しを起点に 1 キロに及ぶ桜の巨木がつくる見事な花のトンネル、揖斐、木曽川に向かう道にはレンゲ・タンポポ・スミレ草が巨大な絨毯を敷きつめていた。走りまわり転げまわったあの香わしい故郷はどこへ行ったの？

何かの対談で、思わず国の防災対策の考え方を問うた。新しい技術なら二者択一ではなく、安全と自然との両立が可能なはず！と。このテーマになるとつい感情がこもりがちな私を、叱るでもなくたしなめるでもなく、静かに「そうだね」と一言。それを生涯考え続け闘ってこられたご本人に、何もせず気分任せて言いたい放題の自分を、これほど恥じたことはなかった。どうか浅学非才、未熟なこの弟子をお許し下さい。

下河辺先生、貴方がお育てになられたたくさんの方々が、これからその志を受け継いで新しい時代創世に尽くされることと思います。

私も、叱っていただいた数々の場面を“光”として、80 歳になった今、改めてわが本番人生、これからの 50 年に生かします。

ありがとうございました。❖

国土政策は世界史の中に

近藤共子（アジア防災センター所長）

平成に入って間もない頃から、下河辺先生のお話を役所の職員がうかがう会の末席を穢すことを許され、知的興奮に溢れる時間を過ごさせていただいた。この会を通じて、先生の聲咳に接する貴重な機会をいただき、仕事をしていく上で、また世の中の動きを眺め考えていく上で、道標となる言葉をたくさん授けていただいた。

諸先輩から、新人だからと促され、幼い質問をさせていただいた折も、先生はいつもの淡々とした口調で、丁寧に言葉選び応えて下さったことが懐かしく思い出される。

どういった脈絡であったのか、一体先生は、どのように数々の反対や障害を乗り越え、政策を実現に導かれたのですかとといった趣旨のことを伺った。

先生は、何年かかっても同じことを言い続けていくこと、時間をかけ、諦めず、知恵を働かせて何度でも「言い続けていくことの重要性」を真剣に諭して下さいました。諸先輩は「理事長も女性には優しいから…」と苦笑されていたけれども、若者には寛容で真っすぐに応えて下さる方なのだと素朴に信じていた。今でも信じているのは、相変わらず幼いからなのかもしれない。

省庁再編に相前後してフランスに赴任させていただいた。この間、2003〔平成11〕年に、パリ集中是正や産業の地方分散を進めてきた旧国土整備庁（DATAR）の設立40周年記念式典を傍聴する僥倖に恵まれた。オリヴィエ・ギシャール初代長官をはじめ歴代長官が列席し、シラク大統領が祝辞を述べた。国土政策を重視してきたもうひとつの国の歴史をソルボンヌの講堂で再認識した。行政組織は永続するものではなく、殊に国土政策は特定の時代の局面の要請に応えるものである面も大きい。日本の国土政策は新たな時代に向けて先んじて進展し、30周年を前に国土庁が再編されたこと、下河辺先生の数々の言葉に思いを馳せつつ、会場を出たこの日のことを、昨夏改めて思い出した。この翌年ギシャール元長官は亡くなった。

下河辺先生は、後世の歴史家がこの時代の国土政策をどのように描くのか楽しみだといった趣旨のことも、折に触れて話されていたと記憶する。

現在、アジア諸国とともに防災の仕事をさせていただいている。多くのアジアの国々は、いわば、大正、昭和の時代、都市化の時代、環境と開発のせめぎ合いの時代を迎えている。さらに、今日のアジア諸国は、気候変動への適応にも直面している。少し遅れて開発の時代を迎えた国々の試行錯誤も大きな視野に、日本の20世紀の国土政策は、やがて将来の歴史家に世界史の中で評価されることにもなろう。アーカイヴスはアジアや世界も視野に、守り育て新しい意味を見出し発信していくことが求められている。下河辺先生の宿題なのかもしれない。

「公共政策というのはそうやってどんどん新しい展開をして、ゴール求め永遠に駆けていく」のだから。❖

オオムラサキ

高島由美子（下河辺淳秘書）

思い返せば本当に不思議な縁であったと思う。東京海上研究所で秘書として出会い、退職後も何かと手伝いをしながら気が付けば 25 年が経っていた。

既に車いす生活とはいえ元気に過ごしていた下河辺が小脳梗塞で病院へ搬送されたのは、2014 [平成 26] 年 1 月末のことだった。運動を司る小脳の梗塞は、眩暈と吐き気が続き症状が治まるまで時間がかかる。あれほど食べることが好きだったのに頑なに食べようとせず、点滴だけでどんどん痩せていく姿を見るのが辛くなった頃、腹部から栄養を摂る腸瘻の手術を勧められた。当時本人に判断する力がなかったため、夫人と相談して 3 月にその手術に踏み切った。「このままでは命が尽きてしまう。また食べられるようになる」—そのとき私たちはそう信じていた。手術後もなおひどい眩暈は続き、嚥下機能が低下して、とうとうものを食べることができなくなった。結局症状が治まるまでに半年を要したが、その後 2 年ほどは意思表示もできていたので、それなりに穏やかな時間を過ごすことができた。

下河辺が旅立った 2016 [平成 28] 年 8 月 13 日は、少し変な言い方をすれば、よくぞこのタイミングでというほど見事だった。

亡くなる前日の午前中はお世話になった外科の先生の処置を受け、午後には療養中の唯一の楽しみであったマッサージをしてもらった。私は明日また来ることを約束して夜には帰宅したのだが、翌日明け方に夫人が昔の思い出話をしたところ、下河辺は目を開けてじっと聞き入っていたそうだ。朝 6 時、仲の良かった介護士さんの問いに、しっかり頷いて反応を見せたのに、1 時間後には眠るように息を引き取った。一番お世話になった看護師長が休暇に入る直前のことだった。下河辺は療養中にお世話になった方々に、きちんと挨拶を終えて去っていった。天気までも味方につけて…。その日は夏には珍しく、穏やかに晴れた爽やかな朝だった。

下河辺の自宅は都心のマンションでありながら、裏に雑木林がある関係で色々な生物が共生している。エレベーターから玄関へ続く長い外廊下は、夏の夜ともなれば、虫の苦手な私にとってちょっとした肝試しだった。

下河辺が亡くなる 2 週間前のこと。恐る恐る歩みを進める私がやっと玄関にたどり着く直前で大きな蝶が羽を休めていた。その前を通り過ぎたときにパタパタと飛び立つその姿はどう見てもオオムラサキ。後に調べたところ、都心でも国蝶のオオムラサキを見ることはあるそうだ。

亡くなった人が蝶に姿を変えて会いに来るという話を聞いたことがある。今思えば既に言葉を発するのが困難になっていた下河辺が、蝶の姿を借りて何かを伝えにきてくれたのではないだろうか。美しく大きなオオムラサキというところがいかにも彼らしいので、そう信じている。

最期まで本当に強い人だった。再会したら尋ねたいことがたくさんある。いつものように、からかい半分、皮肉交じりに答えてくれることだろう。その時に恥ずかしくないように、これからも充実した人生を過ごしていきたいと思う。✧

下河辺淳さんの思い出

富田玲子（建築家／象設計集団東京事務所主宰）

下河辺淳さんは千穂子さんのお連れ合いです。千穂子さんは私の母（故人）の一番仲良しのいところですから、私は淳さんには数えられるほどしかお会いしていないのに、とても親しみを感じていました。東大の建築の研究室で出会ったお二人のご結婚のとき、形式上の仲人として、岸田日出刀先生と私の祖母が、新郎と新婦の両脇に着席したのだと、私が建築を学ぶ頃になって聞いた時にはびっくり仰天してしまいました。花嫁の伯母だからといって、大先生と並ばせるとは！　そういうところが、おかしなお二人の翔んでるスタートだったのでしょうか。

私が中学生だったころ、母と祖母が千穂子さんを通して淳さんに家の玄関まわりの増改築計画をお願いしました。大正から昭和にかけての「文化住宅」といわれる小住宅で、でこぼこの多い平面だったのが、改築によってすっきりして便利になりました。建築中に、設計者は忙しいと言ってあまり現場に現れないのです。建築家ってそんなに忙しいのかしらと不思議に思いましたし、母も祖母もぶつぶつ言っていました、ほんとうは都市計画家が親類の家のリフォームにかかわる暇なんであるはずなかったのです。申し訳ないことをしたものです。それなのに、たまに来てくださったときにはとてもにこやかな魅力的なお兄さんでした。

それから何年もたって、私が建築の仕事をするようになってから何回かお会いしています。淳さんに連れられて、宮城まりこさんの「ねむのき学園」にうかがったことがあります。宮城さんの子どもたちへの思いと子どもたちのすばらしい作品群に、胸を打たれる一日でした。宮城さんから大変信頼されているようにみえた淳さんが、私を紹介してくださり、宮城さんが探していらした「子どもの美術館」の設計者としてどうだろうかと、私たちのいろいろな作品について話してくださいました。宮城さんも大いに共感を示してくださり、前向きに考えてほしいと言われました。とてもありがたいお話と思って帰ってまいりましたが、どういういきさつだったのか覚えておりませんが、そのお話はないことになってしまい、私も積極的に動こうとはしませんでした。何年か前、学園内に藤森照信さん設計による素敵な「子どもの美術館」が建てられました。あのプロジェクトだったのかどうかはわかりませんが、もしそうだとしたら残念なことをしたものだと思い、せっかく紹介してくださったのに進めようとしなかったこと、淳さんに申し訳ないと思っています。

私が所属している象設計集団で、メンバー全員参加で小さな仮想宿泊所の計画のコンペをして、淳さんに審査員になっていただいたことがあります。その講評が素晴らしかったのです。提案者自身も気づかなかった良い点を取り上げて、深い知識にもとづいて、イメージをふくらませて、おもしろおかしく説明していただいて、大感激する人もいたのです。❖

あの大きさがあっての今

中村桂子（JT 生命誌研究館館長）

私の中にある大切な物語。始まりは 1980 [昭和 55] 年です。1985 [昭和 60] 年に筑波学園都市で科学技術博覧会が開催されました。国の研究機関が主体の学園都市構想と連動する博覧会のテーマは「人間・居住・環境と科学技術」です。牛尾治朗さんを委員長とする基本構想委員会の末席を汚していたからでしょうか。具体策のリーダーでいらした下河辺さんからお声がかかりました。「大事なのはお祭りそのものではない。これを機会に科学技術のありようを考えることだ。5 年という時間をあげるから“科学技術と人間”というテーマをとことん考えなさい。」

悩みました。科学技術の光と影について触れ、影を少なくするための制度や倫理の確立を述べればレポートは書けます。でもそれだけはやるまい。本質を探らなければ下河辺さんへの答えにはならないと思ったのです。女性が集まって暮らしに根ざした考えをやりとりするなど、いくつもの試みをしましたが、納得のいく答えにはなりません。期限切れで不本意な報告を出しました。

実は当時、本業でも悩んでいました。生命科学とそこから生れるバイオテクノロジーへの期待が高まっていましたが、生きものを機械と見て部品を取り替えるような技術が、本当に暮らしやすい社会につながるのだろうか。人間とは何か、生きものとは何かという問いを突きつめたい気持ちです。その時アメリカのがん研究者が、細胞内の DNA のすべてであるゲノムを解析しようと言いはじめました。ゲノムという言葉にピンと来ました。DNA のすべてということです。これで科学を捨てずに生きものそのものを研究できると思ったのです。しかもこれが下河辺さんへの本当の答えだとも。

そこで総合研究開発機構（NIRA）の研究として取り上げて下さるようお願いし、そこからは迷うことなく進みました。岡田節人、多田富雄、松原謙一という、すばらしい先輩に相談しながらの研究ででき上った報告書『生命科学における科学と社会の接点を考える ― 生命誌研究館（Biohistory Research Hall）の提案』は、思いを込めたものとなりました。

NIRA の理事長室で報告書についてお話し、「これを実現したいのです」と申し上げた時は、さすがの下河辺さんも「えっ」という顔をされました。「これまで報告書をたくさん受けとったけれど、実現を相談されたのは初めてだ」と笑って。でも真剣に考えて下さいました。

「生命誌研究館」。1991（平成 3）年に準備室が誕生し、1993 [平成 5] 年に大阪府高槻市で開館しました。すでに 26 年、今では具体の姿が見えています。しかし当初は、「生命誌」も「研究館」も未知数、一体何なのか下河辺さんもおわかりになってはいなかったでしょう。

正直私自身どうなるかが見えていたわけではありません。でも長い間考え続けた結果、頭に浮んだコンセプトです。思いだけは溢れており、突っ走りました。ハラハラして見ていらしたに違いありません。でも見守って下さいました。本当に大きな方。毎日の活動の中で、「あの大きさがあっての今」だと思い続けています。✧

ありがとうございました

日根野真弓（オフィス日根野代表）

長い電通勤務の中でも、下河辺さんのプロジェクトを担当している時が、最も伸び伸びと仕事ができたと感じます。こんなことを言うと身の程知らずの図々しい奴と言われそうですが、わたくしとして下河辺さんの前では相当緊張していました。緊張はしていましたが、同時にゆったりとした安心感が同居していたのです。

総合研究開発機構（NIRA）のプロジェクトを担当させていただいたのが下河辺さんとの仕事の最初で、「こんなに短期間に、こんなに多くの難しい事をやるのか」と不安を抱えながら新宿のオフィスへ通いました。それから数年後、東京海上研究所が設立され、下河辺さんが理事長に就任されました。その頃、私は天谷直弘氏が研究所長を務める電通総研へ出向中で、設立間もない東京海上研究所からプロジェクト関連のお仕事を頂戴し、その後本社に戻るまでの8年間、ほとんど間断なく研究会やフォーラムのお仕事をさせていただきました。

ある時、今野由梨さんが真っすぐ私の目を見ながらおっしゃいました。「肝に銘じておきなさい。天谷直弘の部下であり、かつ下河辺淳の仕事ができるということが、どんなに幸運なことか」と。

私は全く素直にその通りだと思いました。下河辺理事長や天谷所長の薫陶を受ける中で、敬愛する人の下で仕事をする喜びを実感していたところだったからです。お二人とも仕事に厳しく、なかなか合格点をくださいません。でも、いざという時には必ず手を差し伸べてくださる、と勝手に確信していました。

「下河辺さんは女性に甘いから、君の企画書を通してくれるんだよ。僕らには黙って突き返すばかりだった。女性にはちゃんと説明するんだよ」と、NIRAに出向していた先輩たちは言います。確かに女性に優しい方ですが、甘いではありません。女性が仕事をするにはまだ多くのハンディを背負っているという現実をよく見ていらっしゃったのです。だからきちんと説明してくださるのです。どなたかに紹介してくださる時は、「この人に任せれば大丈夫。安心ですよ」と、女性担当者に不安を感じる人の壁を取り払ってくださいました。かなりの下駄を履かせた紹介なのですが、下河辺さんにこう言われると相手の方も「そうか、それは良かった」という気になってしまうのです。

下河辺さんにはたくさんのファンがいましたが、若い人にもモテました。あるフォーラムのためのビデオ制作中、粗編集の段階で見ていただくことになりました。20代、30代のスタッフとビデオを見ながら、下河辺さんは変更や追加を具体的にどんどんおっしゃいます。若いスタッフたちも技術的なことや映像構成について臆することなくお話しします。打ち合わせが終わってスタッフとエレベーターを待っている時でした。一番若いスタッフが「あのおじいちゃんのためだったら、何でもやる気になるな」と言ったのです。これほど端的に下河辺さんの魅力を伝える言葉を聞いたことがありません。

下河辺さんから学ぶことは、最高のエンターテインメントでした。

ありがとうございました。❖

下河辺さんの沖縄での私的交流

比屋根米子（元那覇市職員）

下河辺さんとの思い出を書いてほしいと依頼がありました。

総合研究開発機構（NIRA）の関係者でもなく、何ら接点が無かったのに、どうして知り得たのでしょうか。それは、私が那覇市の職員であり、市の総合計画策定の部署にいて、そのための関係資料等を求めて沖縄県庁に出入りしていたからだと思います。

折しも、県は国際都市形成構想を打ち出し、東大、京大出身の頭脳集団率いる国際都市形成推進室が脚光をあびていて、沖縄県の未来は自分たちが、という復帰前の琉球政府時代を彷彿していました。そこで、復帰前の屋良朝苗知事時代から沖縄との関わりが深い下河辺さんの存在を知ることになったのです。

幸いなことに推進室には知り合いの東江隆美氏がいましたので、県のキーパーソンだった坂ロー氏を介して、下河辺さんに那覇市での講演会を依頼するチャンスを得ることができました。1997〔平成9〕年2月18日、講演会は「新しい国土計画と新全総における那覇市の位置について」というタイトルで開催されました。

それからです、下河辺さんとの関わりは。職場では、日本の国土計画の権威者を簡単に招聘する軽さに呆れられましたが、秘書の高島由美子さんとお友だちになり、来沖のたびに会いました。勝手に、自称「現地秘書」として振る舞い、公務終了後の時間を有効活用しました。知り得た人を色々な人に会わせて交流させるのが私の趣味ですから、可能な限り、様々な人との交流や会食を設定しました。沖縄県経営者協会の役員、民間で活躍する女性グループ、上海の友人等々。

普天間基地問題で山場を迎えていたころでしたから、もうそろそろ来るなと感じたら、高島さんに電話して情報を得ていました。空港まで迎えに行き、挨拶したら、プライベートの時間の打ち合わせを確認して帰る。焦点になっている普天間基地、キャンプフォスター等の基地の案内もしました。これには、後日オフレコがつかしました。特に設定してくれた知人は仕事に影響が出たことを後で知りました。

ある時、下河辺さんが日中友好団長として中国の西安を訪問することになりました。上海在住の友人は、琉球大学で研究していた時に引き合わせたので、中国に帰国した後も交流がありましたから、下河辺さんと合流する計画を考えました。でも友人の手違いで西安行きの飛行機に搭乗できず、下河辺さんに西安で待ちぼうけさせてしまいました。

あんな失態は初めてです。行けないことをどう連絡するか右往左往でした。こんなことをしでかしたのに、その後その友人グループの皇居見学の設定など、私的な日中友好を推進してくれました。そこで、元環境庁の小野寺浩さんにも引き合わせていただきました。

昨年、帝国ホテルで行われた下河辺さんのお別れの会には、上海の友人も駆けつけ、お別れをしました。

下河辺さんは、素晴らしい偉大な方でした。ありがとうございました。❖

転機となった下河辺理事長との出逢い

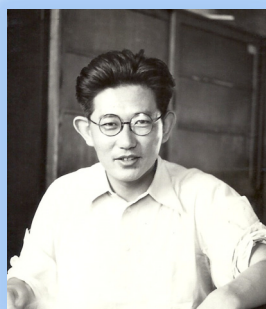
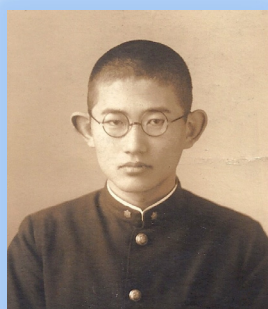
藤田桂子（東京海上日動火災保険株式会社北東京支店部長）

東京海上研究所の初代理事長であった下河辺淳さんに初めてお会いしたのは 1994 [平成 6] 年の春。理事長の中国関係の業務をお手伝いすることになり、ご挨拶に伺った。著名な方ということで緊張した面持ちで伺ったところ、「まず、中国の経済を勉強してきなさい」と、社会主義市場経済について中国語で書かれた本を渡された。当時中国は鄧小平の南巡講話を経て社会主義市場経済がスタートし、保険業も上海を実験地とした外資開放が始まって間もない時期であった。中国語は大学以来接していなかったが、「これは採用試験のようなもので、試されているのかも」と、辞書を引きつつ必死にその本を読みレポートにまとめて行ったが、それを使って議論することはなかった。後から振り返ればそれは理事長のご友人の著作であり、ちょうど良いので渡されたということだったようだ。その後約 4 年間、私は下河辺さんの近くでアシスタントしてご指導を受けつつ仕事をするようになる。

理事長室に入ると大体 1～2 時間くらい、お話を伺う。理事長の話はいつもとても興味深く、スケールが大きく、その貴重な言葉を漏らさないようにと必死にメモを取る。話を聞いていると良く判る気がして頷きながらメモするのだが、席に戻って見返してみると全く理解できていなかった、ということがしばしばあった。世の中が来たる 21 世紀に関する話をしていた時代、理事長は 22 世紀に向けた構想を話されるのだから、凡人の私の理解が追い付かなかったのも無理はない。理事長はいつも諭すように、そして時には厳しく、私を鍛え、私の視野を大いに広げてくださった。

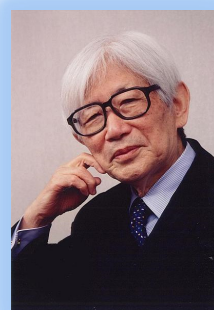
中国には理事長に同行して何度も出張した。学生時代からフリーで旅行して旅慣れていたが、きちんとした鞆は持っていなかったもので、初の上海出張が決まると週末に慌ててスーツケースを買いに行った。ところが週明けに上司から「理事長は荷物が少ないので出張は手荷物で行きなさい」と言われ、新品のスーツケースを置いて出かけたのが初出張の思い出である。旅先の理事長は朗らかで、現地の方に勧められると何でも試し、何でも食べて周囲を喜ばせた。ただし、いつものようにやや難解な話を、通訳を介して中国の方とされるので、それをまとめるのはさらに大変であった。

1998 [平成 10] 年、私は理事長の紹介で北京の中国社会科学院に派遣され、客員研究員として 2 年余りの間、中国の経済・社会について学ぶ機会を得た。その後、上海と台北にも駐在することになり、振り返れば様々な異文化体験をしつつ、様々な立場で仕事をしたことが私を大きく成長させ、自信を持たせてくれたと思う。当時の会社の仕組みの中で女性が海外に行くことはハードルが高く、理事長の勧めがなければ実現しなかったかもしれない。まさに、転機を与えてくださった恩人である。一時帰国の際などに伺っては近況報告をしていたが、私の変化を喜んでいただけていたとすれば、少しは恩返しができたのかなと思う。❖



Message

みなさまのおやさしいお気持ちに
支えられて、
下河辺は最後まで幸せでございました。
本当にありがとうございました。
下河辺千穂子





【下河辺淳氏 略歴】

1923（大正 12）年 9 月	30 日、千葉県市川市にて出生
1947（昭和 22）年 9 月	東京大学第一工学部建築学科卒業
10 月	戦災復興院技術研究所
1948（昭和 23）年 6 月	建設省住宅局兼建築研究所
1952（昭和 27）年 12 月	経済審議庁計画部計画第二課
1957（昭和 32）年 4 月	建設省計画局総合計画課長 課長
1962（昭和 37）年 3 月	東京大学工学博士
8 月	経済企画庁総合開発局 調査官
1966（昭和 41）年 9 月	経済企画庁総合開発局 課長
1970（昭和 45）年 8 月	経済企画庁総合開発局 参事官
1971（昭和 46）年 5 月	経済企画庁総合研究開発調査室 室長
1972（昭和 47）年 6 月	経済企画庁総合開発局 局長
1974（昭和 49）年 6 月	国土庁計画・調整局 局長
1977（昭和 52）年 11 月	国土事務次官
1979（昭和 54）年 7 月	国土庁 顧問
11 月	総合研究開発機構 理事長
1991（平成 3）年 11 月	総合研究開発機構 特別顧問
1992（平成 4）年 4 月	株式会社東京海上研究所 理事長
1995（平成 7）年 2 月	阪神・淡路復興委員長（～1996 年 2 月）
1996（平成 8）年 4 月	勲一等瑞宝章受章
2001（平成 13）年 7 月	株式会社東京海上研究所 特別顧問
2003（平成 15）年 7 月	下河辺研究室 会長・（有）青い海代表取締役 会長
2014（平成 26）年 6 月	下河辺研究室・（有）青い海、閉室
2016（平成 28）年 8 月	13 日、永眠

Key Information

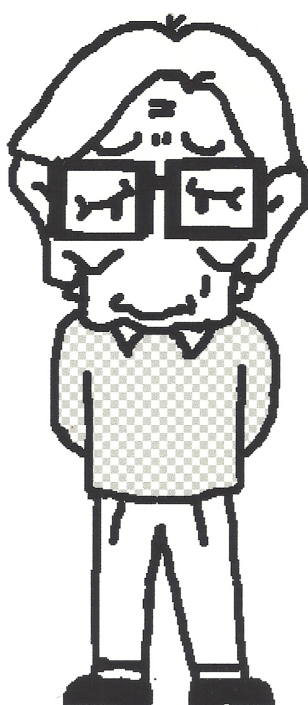


illustration by LUCY.

植物的都市から鉱物的都市へ

下河辺淳（経済企画庁参事官）

わが国の町は、木造の建造物で構成され、土蔵があるが、石造はまれである。土から屋根瓦や壁材が生まれ、草で屋根葺やタタミができ、紙で障子やフスマができた。柱や板材はすべて木材で、化粧も木目によって考えられ、金物も少量で、もっぱら大工の技術によって木割され、組み立てられている。建物の高さも平均して2階にもみたくない低層の町であった。道路も、石や煉瓦で舗装されずに、土を踏みかためたものであった。土と、木と、紙と、草とでつくられた町である。熱は薪炭であり、光は植物油であった。

こうした町を、植物的な都市ということが出来るかもしれない。ごく最近まで日本人はこの植物的な都市に生活していた。この植物的な都市は、どこか人間に親しみを感じさせるものがある。町の構造も、徒歩のスケールでつくられているためでもあろう。

やがて、この町にも近代産業が、ガラスをもちこんでくる。大正の震災後は、トタンが大量に使用され、釘などの金物も増加した。

しかし都市は依然として極めて植物的であった。植物的な都市は、火災にも、風水害にも大きな抵抗力は示さない。災害で容易に消滅してしまう。しかし極めて簡単なとりかたづけをすませると、再びもとの町が再現する。廃棄物は少ない労力で自然にもどることができた。災害でなくとも、年限がくると老朽化して、リプレースを必要とした。町は、植物的な弱さと強さを持っている。日本の風土のなかで、人間が自然にさからうことなく、たくみに作りあげたリサイクルのメカニズムであり、安定したリズムをもっている。

* * *

植物的な都市に煉瓦造りが加わり、やがて鉄筋コンクリート造り、鉄骨コンクリート造りが入り始めた。道路はコンクリートやアスファルトで舗装され、鉄道や自動車による交通が入り込んできた。ここで植物的な都市としてのリズムやリサイクルのメカニズムを失ってしまっている。

都市計画は、新しい都市の形態をつくりあげるため、新しいリズムを求めて努力を始める。都市化、工業化が急速にすべりだし、都市人口が増加し、産業が都市に集中した。都市の巨大化を追って、蜘蛛の巣のように、道路、電線、ガス、水道などのネットワークをつくり、中高層のコンクリート造りの建物が建設される。都市は、煉瓦と、コンクリートと、鉄と、アスファルトでつくられる。熱は石炭、光は電気となった。

こうした都市を鉱物的な都市ということが出来るかもしれない。現在、日本人は、この鉱物的な都市に生活している。この鉱物的都市は、20世紀の技術文明を象徴するかのごとくである。自然の中に都市という物が生れ、新しい都会の景観をつくる。鉱物的都市は半永久的な構造として考えられていた。

* * *

しかし人間の住む都市は、生き物のごとく成長し、変化し、人間にとって手におえない化物となり、強烈な新陳代謝を要求する。植物的な都市とちがって、鉱物的な都市は、新陳代謝の

ためにスクラップすることが容易ではない。しかもコンクリートや煉瓦や、アスファルトの廃棄は再生不能で、その処理は、量が多くなるにしたがって極めて困難なものとなる。

鉱物的な都市は、この限りでは死んだ町である。廃棄物の捨て場、つまり都市の墓地を用意しなくてはならない。墓地は、都市の大きさだけの空間を必要とするかもしれない。

もし死なせないとすれば、古い都市は機能が低下し、環境悪化してもそのまま残存させながら、外延的に、次から次へと周辺に拡大することになり、巨大な不死身の怪物ができあがることになる。しかしやがて再開発が問題となり、超大型の手術を必要とする。おそらく、ここまでくると、都市の廃棄物処理のための技術も飛躍的に進歩するのかもしれない。

こうした鉱物的な都市のなかで、コンクリートにつつまこまれた鉄も、大きな労力なしには回収されないけれども、鉄は、リサイクルのメカニズムを持っている。しかし鉱物的都市の時代では、鉄も半永久的な構造材として、高張力や防錆が要請される。すべて超への挑戦が技術の問題となる。この技術の成功によって大型のビル、橋梁、地下鉄、高速道路など都市の主材料を鉄とする時代を迎えている。

つぎには、石油化学がプラスチック技術を提供し始めた。鉄やガラスの一部はプラスチックに入れ替えられる。熱や光も石油のカロリーをベースにする。鉱物的な都市の石油化が始まる。プラスチック材料は、老朽化しない錆びないことに大きな特色がある。成型も容易で見た目も美しく、コストダウンに成功すれば、鉄に代わって、半永久材としてプラスチックの時代が来るかもしれない。

しかし生き物の都市が、新陳代謝を要求するときに、プラスチックの廃棄は容易ではない。世界各国においても早くもプラスチックの廃棄処理には頭を痛めている現状である。

* * *

どうもこう考えてくると、鉱物的な都市は、どこか欠陥があって、人間にとってもてあましげみの感じがのこるのではないだろうか。

将来、人間の生活空間は、自然から区分された物としてではなく、メタボリックな生物体として、リサイクルのメカニズムをもち、ダイナミックなリズムをもつものとして考えられるだろう。新しい生成システムを、発見しなければならない。新しい生活空間を構成する材料もまた、生成システムを受け入れるものではなくてはならない。熱や力で変形することや、化学的に錆などの変化を示すことが自然環境のなかでも、人口環境のなかでも重要視されて、変形や性質の変化が、コントロールされ、あるリズムをもち、リサイクルのメカニズムを持つことが要請される。

鉄という元素の持っている固有の性質から、鉄がどのように新しい生成システムを構成する物質たりうるかが問題である。おそらく、鉄という元素に、あるエネルギーと、ある情報が加えられたとき生きている材料ということが出来るだろう。植物的な都市から鉱物的な都市へ移行し、さらに新しい生活空間を求めて変化する人間生活の中で、鉄の役割も変化する。✧

【下河辺淳アーカイブス所蔵】

『営業旬報 NO.25』1971年4月、新日本製鉄（株）

資料番号：197104002

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=197104002&sub=>

人間のリズムと社会

下河辺淳（経済企画庁参事官）

人間の生体のリズムの一つに、サーカディアン・リズム、つまり生理時間内変動リズムがある。

体温、呼吸、脈拍数、ホルモン分泌などの日内変化のリズムが乱れると人間の生理的変調と不快感をもたらすという。このサーカディアン・リズムの問題は、24 時間都市論、情報化社会論にとって、課題である。

現代社会の中で、交通、通信の技術進歩はめざましいものがある。

人間が歩く、泳ぐことしか知らずにすごした時代にくらべて、機械力を利用して、移動することを工夫した時代は極めて短時間にすぎないが、最近になってとくに高速化が格段と進んでいる。そして、交通・通信のネットワークの形式が、全国的、国際的に広がりつつある。

このネットワークとサーカディアン・リズムの調和が問題となってきた。

アメリカの大統領は世界中から、アメリカにとって無視しがたい、即刻処理しなければならない情報が、ネットワークを通じて 24 時間一日中入ってくことに耐えなければならない。

アメリカとベトナムの時間差、アメリカの東海岸と西海岸の時間差は、情報交換機能にとって明らかに障害物である。

マッハを超える旅客航空ネットワークも、ハードウェアとしてすぐれているけれども、人間のサーカディアン・リズムにとっては、時間差の克服は限界があり、高速で到達しても、リズムの回復時間を必要としてしまうのである。

人間は、地球を分割して等時間帯を協定した。船舶で全地球を交流した時代に、一時間分割線を定めた。しかし今日のように高速化、情報化された交通・通信ネットワークの完成により、地球の等時間帯は再検討の必要がある。人間の生体リズムに適合するネットワークの設計と、等時間帯の設計とがたくみに組み合わせられねばならない。東西間の問題にとって重要な課題であり、南北間の問題にとっても更に重要な課題である。このことは、新しい生体的なゾーン、コミュニティーを意味する物であろう。

サーカディアン・リズムと交通・通信ネットワークの問題は、地球レベルの問題に限らず、国内の課題でもある。

日本列島は、高速化情報化によって、一日行動圏が可能であるとされている。しかしこのことはあくまでハードウェアとしてである。

人間の生体リズムとしては問題をのこしている。現在、新幹線網が建設されつつある。この新幹線の速度は、おそらく時速 200 キロから 250 キロであろう。東京—大阪間は 3 時間、東京—盛岡間も 3 時間という距離になる。おそらくサーカディアン・リズムにとって、3 時間という距離はほとんど問題にならないと思われる。

しかし東京―博多、東京―札幌になると7時間距離となる。7時間になると、24時間の中で、サーカディアン・リズムを乱さずにとれる時間帯は極めて限られたものにならざるを得ない。

現在でも、地方から東京に鉄道でくる場合に、夜行の寝台列車が、東京に朝、最適な時間につくことと、列車の速度の調整が苦心のあるところであろう。時には減速して、あまり早朝に到着しないようにしなければならないし、出発もあまり深夜にしないようにする。あまり深夜であれば、夕方から深夜まで、待ち時間となり、酒でものみながら時間を消費するわけで、高速化の意味が疑問になる。

高速道路でも、時速が高まったにしても、短縮された時間がどのように有効であるかが問題で、短縮された時間が生体リズムの回復によってうめられてしまうなら意味がない。むしろ高速化が安全性をおびやかすことの不利益だけがのこりかねない。

情報化社会のなかで、情報化高速化ということについて、技術的、建設的にネットワークが工夫されると同時に、人間の生活リズムとの調和について、一段と工夫がいりそうである。❖

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『季刊コミュニケーション NO.1』1972年4月、(株)国連社

資料番号：197204001

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=197204001&sub=>

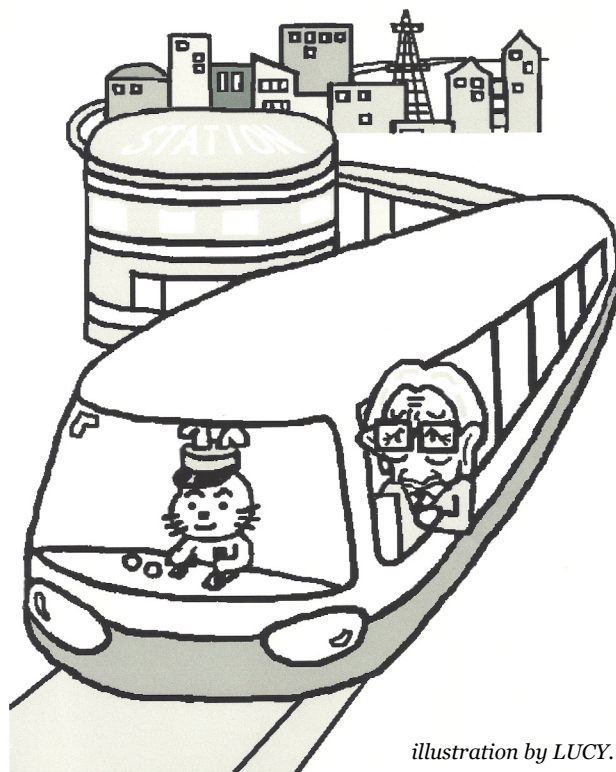


illustration by LUCY.

深夜の三時間が情報収集の勝負、 深い眠りがア「異」デアを引き出す

下河辺淳（総合研究開発機構 [NIRA] 理事長）

日本という国の行く末を決めていくプランナーのひとりが下河辺淳氏である。少し大げさに言えば、氏の発想に日本の未来の何パーセントかがかかっているのである。

「ものを考えるのは完全に夜中ね。昼間は雑事を処理するだけ。太陽の出ているときは“公共財”としての人間ですからね」

1週間のうち2日が臨調、半日の3回が科学技術博、NIRAは毎日3分の1日ずつ、というのが大まかな時間配分である。

「深夜といっても私はのら犬みたいなもので、決まった場所というものがない—」

少なくとも夜10時までは雑事がある。ものを考えるのは夜11時から午前2時までの3時間だ。この間に、つめこめるだけのものを頭につめこむ。

「私の知恵とか、私のアイデアというものはないんです。そういうのは人の脳を頼りにすればいいのね」

よって、できるだけ多くの人に会う。

「異」という言葉が好きだ。異教徒、異邦人、異文化…。そういう「異」に接することが、「異」を借りることがアイデアを出す人には絶対に必要と考えている。役人が役人だけに会っているのはダメ、リサーチ屋がリサーチ屋だけに会っているのもダメなのである。

「私には偉い方にお会いする心臓があるし、若い人でもどんどん会うのね、そうして得た情報を頭につめこむんです」

深夜の思索時間、そうした情報がこなしきれず、生理的ストレスによって摩擦熱が出る。それを整理し、発想を引き出すのは睡眠なのである。

横になるとコトッと眠る。10年前、高知に出張して泊まった宿屋の隣が火事で焼け落ちた。下河辺氏の部屋の雨戸も放水でびしょ濡れだったが、朝まで気づかなかったほど眠りは深い。

午前7時半、目覚まし時計なしでプラスマイナス5分の誤差で目が覚める。数十年来、睡眠は5時間と少し。経企庁時代、政府が経営する小さな会社が倒産寸前となり、担当者たちは徹夜で対応策に追われた。このときも下河辺氏だけはグウグウ寝ていた。寝たほうがいいアイデアが出るのである。

最近「熟年シンポジウム」があった。翌日何を話そうかと考えるが結論が出ない。そこで眠った。翌朝、テレビに馬が出てきた。その瞬間「馬齢」という言葉が出た。日本にはすごい言葉がある。馬は歯をみれば年齢がわかる。そういうハードウェアの意味に加えて、謙虚でありながら、この若者めがというニュアンスのソフトウェアの意味も「馬齢」はもっている。熟年とはこれだ、という発想が一瞬で出たのである。

朝の起床後30分間に下河辺氏のすべての発想は生産されている。

四色ボールペンのサイケデリック・スケジュール表の謎

情報の仕入れは酒があるとできない。そのため 20～30 年来飲まない。メモもとらない。「悪筆で自分でもあとで読めないのね。字が書けない」

メモをとらないマイナス面は、忘れる、誤解したままになる、あとで繰り返せぬといった点。プラス面は、必要ないことは消える、自分の独断で覚えている、利用できる型で覚えている、という点である。

「ごちそうと同じで消化してしまうのね。私の場合は感情的ね。はいつたときの快感のようなもので覚えている」

小学校 1 年まで左利きだった。2 年のとき先生に無理やり矯正されたが、右ではうまく書けぬまま左手の使い方も忘れた。そこで、手紙もメモも、もちろん原稿も書けない。やむなく書いた原稿は秘書が清書するが、読めるようになるには 3 年かかる、かわいそうという。本も自ら書いたものがない。国土庁次官の時代、地方へ出て一筆お願いしますというのがいちばん困った。そこで、一筆書きで日本列島が描けるよう練習した。訪ねた土地を強調して線を引くことでこなしてきたのだという。

字が書けないので手帳も持たない。ただし内ポケットには NIRA で印刷した 1 カ月分 1 枚の予定表がはいっている。

「サイケなメモだから見せられない」が、BIC の 4 色ボールペンで色を使い分け、記号でスケジュールが記入してあるらしい。このインタビューは、緑のインクで X 印に「山」らしき字が約束の時間のところにはいつているのだそうだ。

黒は雑事、赤は役所や臨調、青は NIRA、緑は科学博その他、と大ざっぱな使い分けがある。臨調・役所が赤なのは「火事」なので消しにいかねばという感じからである。

このスケジュール表をいつも 3 カ月分持ち歩いている。ひとつの考え、ひとつの仕事の単位が 3 カ月のためである。

4 色ボールペンは、1 色でもインクがなくなると捨てる。そのときどきによって、先になくなるインクの色が異なる。それによって、ここしばらくの行動や精神状態がわかるかもしれない。

仕事ではじっと座っているのが苦手で、座ると頭がまわらなくなる。NIRA の自室でも立っていることが多い。「私は情趣的な人間なんだろうね」✧



illustration by LUCY.

※「特集 頭脳全開！ヒラメキを引き出す発想工房」、ダイヤモンド・ボックス、1982 年 2 月号より転載）

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

「特集 頭脳全開！ヒラメキを引き出す発想工房」／『ダイヤモンド・ボックス VOL.3 NO.2』1982 年 2 月、(株)ダイヤモンド社

資料番号：198202001

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=198202001&sub=>

森とむらへの思い

下河辺淳（総合研究開発機構 [NIRA] 理事長）

昨年の10月初旬に、天山山脈を超えて、東端のトルファン盆地を訪ねた。風砂の激しい砂漠である。この盆地で、風砂と闘う人々の努力に感動した。彼らは、オアシスから数十メートルはなれたところに防風砂林のベルトをつくる。ベルトは、幅5～10メートルぐらいである。長さはすでに総計2000キロを超えるという。このベルトにはまず幅も深さも30センチぐらいのうねうねとした毛細水路をつくって水を流し込む。

そして苗木が植えられる。水は、天山山脈の雪水が砂漠に入るのを地下坑(カレーズ)で導かれたものを利用する。苗木はニレの木、柳、ポプラ、桑など組合せている。それぞれに、風砂に強い、乾燥に強い、寒さ、暑さに強いなどの特性を持っているので、組合せて植えられている。砂漠のニレの木、いかにも風砂に耐えて苦闘した姿をみせてくれる。こうしてベルトは20～30年で一応の姿に生長する。こうなるとベルトの内側の数十メートルの土地は農地として耕作が始まる。さらにその外側の数十メートルのところにベルトがつくられるというふうに、砂漠に向かつて人間の闘いが繰返し行われている。

トルファンは果物、野菜の宝庫、豊富な地域である。人と砂と風と水と太陽のかかわりあい、草木が、不可欠な存在となっている。人々は盆地のもっている天恵の中で、歴史的な伝統から生まれた知恵の伝承を受け、豊かな生活をつづけている。

わが国は、あまりにも草木にめぐまれ、森林の面積も国土の65%を占めている。それだけに人間と草木の問題については、とかく見失われかねない状況にある。人間生活と草の問題が、砂漠地帯の人々のそれとは、全く異なるものである。

しかしいうまでもないことであるが、わが国の場合、元来、「森とむら」が日本のそして日本人の文化の原点である。20世紀において、工業化、都市化を通じて近代化が進められる過程で、「森とむら」が消滅したような印象があることを否定できない。森は経営上の不振から見捨てられ、むらは、産業構造の変化と脱農により滅びるという事態である。

しかし今日では、森は森、むらはむらの問題として振興策が語られるのではなくて、日本が、そして日本人が、そもそも人と国土とのかかわり合いにおいて、「森とむら」を考え、なにをなすべきかという課題として語られる時代になった。

超近代的な都市に住む人々が、自分の環境のなかから完全に失ってしまった、「森とむら」を、自分の意識の中にわずかに残されている「森とむら」の思想をたよりに、再び「森とむら」の環境との出会いを求める。

「森とむら」の環境の中にいる人々の心のなかに、近代化にとりのこされた孤独感やコンプレックスから脱却した、自然人としてのゆとりが感じられる。

永平寺の秦貫首が、「溪戸山色の中に八万四千の経文をきき」、「吾常にここにおいて切」という講話をしてくださったことを思い起こしている。

実は、最近、「森とむらの会」という財団が設立された。私も多少お手伝いをしている。

この財団は、日本および日本人の文化の象徴としての森とむらについて語り合い、その輪を広げていこうということで、設立されたものである。企業主でも、学者でも、文化人でも、林業主でも、学生でも、主婦でも、誰でも、「森とむら」に関心のある方々が集まって、旅をし、語り合いをつづけることによって、21世紀への寄りどころが生まれるだろうし、所謂「緑の問題」にも一層の深まりが感じられることになると思う。✧

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『グリーン・エージ VOL.11 NO.1』1984年1月、

(財)日本緑化センター

資料番号：198401007

資料情報：

<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=198401007&sub=>



illustration by LUCY.

これからの地図

下河辺淳（総合研究開発機構 [NIRA] 理事長）

“マップ”を“地図”と訳したのはいつ頃なのでしょう。海図と地図がありますが、“マップ”というと“海図”も含めてでしょうか。“海図”と“地図”があれば、“空図”というのもあるのでしょうか。

今、“地図”ということを考えると、“海図”と“空図”と“地図”が一体になったものに魅力があります。人間が何かをやるときに知りたい情報をという意味からいうと、海図と空図と地図がばらばらというのは困るかもしれません。どういう表現形式になるのかも、おもしろいテーマだと思います。

そういうことを考えていくと、季節ごとに地図が違うのかどうか、“冬の地図”とか“夏の地図”とか、自然の変化と地図の関係がもっと多様であってほしいという感じがします。現在の地図というのは陸測型のコンターと、多少木が植わっているかとか、市街地がわかるだけで、冬はどうなる、夏はどうなるということがないでしょう。

国土庁時代に日本列島の空中写真を撮ろうとして非常に困ったことがありました。それは飛行機からの写真を撮れるのは雲のない日とか、その他の制約があって、予算の限りもありますから、日本列島を同じ日に同時に撮ることができず、3年も4年もかけないと写せません。雪が積もっているのもあれば、カンカン照りののもあって困りました。このときに、自然環境の変化に合ったマップが欲しいなと思いました。海図、空図、地図が一緒になると、まさに季節感がない地図は情報量が少なすぎて困るのではないかと思います。特に生態系が今日ほど問題に

なっているときはないですから、生態系が海図、空図、地図にまたがって情報として提供されるのがマップではないかと思います。

近ごろは立体的な地図まで出てきましたが、あれはとても便利だと思います。今後、海図と空図と地図をドッキングしてコンピュータで解析できるようなソフトができると楽しいでしょう。

今や地図をつくる技術は、非常に進歩してきました。地図の技術が進歩してくると、世界のいろいろな地域や国の地図づくりに対して、日本が資金的、技術的に協力できることになると思います。発展途上国に対しては、国土開発のプランニングにとって欠かせないデータや情報を提供することになるでしょう。日本はそういう貢献を世界に対して考えてもいい時期にきているのではないかと思います。

ただ、海外で地図を一回つくれば、一回つくったからおしまいというわけにはいかないでしょう。地図というのは生き物ですから、子供の写真を写すのと同じで、成長過程を絶えずフォローしていく必要があります。そして、それを時系列的に見ることが、内外を問わず国土を管理する専門家にとっては非常に重要なことではないでしょうか。

さて、今日の情報化社会の中で地図情報も一つの転換期にきているのではないのでしょうか。住所のデータベースなどという発想はもう古く、パーソナルな情報が、みんな地図情報の中へ組み込まれているという必要が出てきているでしょう。一般の市民や車をガイドするというのではなく、集金システム等のパーソナルな情報の地図化が大都市が生きていく上で非常に必要になってきたと思います。

現段階では、統計という数字の表現とマップの表現が、全く水と油で、丸い円の大きさか何かで地図の上に表現してしまうというぐらいに、まだ幼稚な段階にあります。

今後、コンピュータグラフィックスが更に発展し、こんな問題も多分解決してくれるでしょう。人間の営みと密接につながっているマップ、これからのコンピュータ時代には、そんなマップがでてくるのではないのでしょうか。❖



illustration by LUCY.

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『JACIC 情報 VOL.5 NO.4』1990年10月、(財)日本建設情報総合センター

資料番号：199010003

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199010003&sub=>

中学時代を想う

下河辺淳

私達が入学したのは、昭和 11 年で、2・26 事件が起きた積雪の寒い春だった。

昭和恐慌の下で、失業と貧困をかかえて、苦悩する時代であった。私の育った日立は地方の小さい工場町で、不況と失業が、人々の暮しを暗くしていた。

中学に入学して、水戸での生活がはじまった。水戸は県庁所在地であり、水戸学の城下町であったが、近郊農村との交易によって成立する町であった。当時、農村の貧農のくらしは厳しく、働き手が兵隊に出征して苦しい状況であった。

昭和 13 年には国家総動員法が公布され、戦争への道を歩み、卒業した昭和 16 年の 12 月 8 日には、日本軍のハワイ空襲となり、世界大戦となった。

思い起してみれば、日本の激動の時代の多感な中学生生活であった。学友のすすめで、夏期、貧農の家に手伝いに出掛けることもしばしばであった。優秀な友達はどんどん軍の学校を志願した。

昭和 20 年、敗戦を目前にして、日立も水戸も全国の都市と同じように戦災を受け、人々は家を失った。敗戦の日、占領政策を認め難く、若者達が水中の庭に集合するという出来事もあった。敗戦を苦にして自らの命を絶った学友もいた。

私は敗戦の直前に大病で、水戸の病院で大手術を受けていた。敗戦を病弱の身で廃境のなかで迎えた私は、再起して、戦災復興の仕事に身を投ずることとなった。

若者達は、絶望感の支配する中で、幾度も日本の未来に想いを寄せ、語り合いを繰り返していた。

そして終戦後 40 数年を経て、日本は世界の経済大国となり、物質的繁栄の時代を構築した。終戦時、私達には到底予想不可能で、夢にみることもさえないものであった。

水中 5 カ年間の生活は、私達に大きな影響を与えている。この体験が、今日の日本にとってなんであったのか、卒業 50 周年にあたって再考してみたいと思う。❖



illustration by LUCY.

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『本城橋（水戸中学校卒業後十周年記念）』1991 年 12 月、水中卒業五十周年記念事業実行委員会
資料番号：199112002

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199112002&sub=>

魂の入ったお金

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

「日本の未来について、あなたに任せてみたい」

私が最初に松下幸之助さんとお会いしたとき、雑談をしていたら突然、こうおっしゃられた。たしか 1970 年ごろのことでした。

私はびっくりして、「そんな、私は日本の未来を背負って立てるような人間ではありません」と答えると、日本の未来を真剣に考えてくれる人を育てたいのだ、という。あまりに唐突だったので、ずいぶんたいへんなことをいう人だと、そのとき思ったきり、そのままになっていました。

しばらくして、またお会いする機会がありました。すると、

「このまえ頼んだととの返事はどうなったのですか」

とまた持ち出してこられた。私は、日本の未来を動かすような政治家になる気はない、との意を伝えると、

「あなたに政治家になってくれと頼んだ覚えはありません。日本の未来を考えてほしい、とそういったはずです」

その強い口調に、私は困惑してしまいました。そのうえ、その直後、周囲の人からこんな話を聞いたのです。

「松下さんは、あなたにとっても大きなことを頼む予定をされていて、そのために、数十億円規模のお金を用意しているそうだ」

これはまずい、早いうちに断わらなければ、と面会を申し入れました。ところが、幸之助さんは雑談ばかりで、なかなか話をさせてくれない。断わりにきたことを知っているのだろうか、と思っていると、また突然、

「私は、あなたに任せたいといったけれども、あなたには欠陥があるから、いまのままでは任せられません」

といいだしたのです。

「欠陥とはいったい何でしょう？」

「あなたは国立大学を卒業してお役人になれましたが、それ以外の世界をまったく知りません。そういう人に日本の未来は任せられない。ですから、すぐに役所をやめて、2 年間私のところへきて働いてください」

「それで私は何をするのですか？」

「自分が一生懸命つくったものを、人さまにお金を出して買ってもらって、かつ喜んでいただく。そういった世界を経験してもらいたい。そうすれば、あなたは任せるに足りうる人物になります」

私は、人間の思想形成段階での大きな欠陥を突かれたようで、愕然としてしまいました。それまでずっと日本の未来について考えてきたつもりでしたが、それが「欠陥があるからあなたには無理だ」と真っ向から否定されたのです。

私は、もし自分が真剣に日本の未来を考えるのなら、幸之助さんのいうとおりに身を投じるべきではないか。でも、やはり期待に応えられるだけの自信がどうしても湧いてこない。どうしたらいいのか本気で迷い、悩んでいたところ、ある日幸之助さんから、

「あなたは役所でさうとう期待されているようだから、その期待に応えるよう、役所で頑張ってください。私も応援します」

との話があって、結局役所に残ることになりました。

以後たびたび、私を愕然とさせるような指摘がありました。政府系のシンクタンクとして総合研究開発機構（NIRA）をスタートさせるときも、そうです。

このとき、幸之助さんは国土庁の顧問をしていて、NIRA の創設をたいへんに評価してくれました。またその資金として、政府が 150 億円、民間 100 億円、地方公共団体 50 億円の合計 300 億円で始める、という点についても賛成だった。ところが、「民間の資金は政府が経団連にお願いして、会員企業に分割して負担してもらおう」と聞いたとき、ものすごく怒られたのです。

「お祭りの寄付金集めのように集めても、お金に魂は入らない。ほんとうに考えている企業を見つけて、その社長に納得してもらって寄付をもらうべきです。熱狂的な理解のもとで動かなければ、お金は生きてこない」

きわめて強烈な指摘でした。

私は前述したような経緯もあったので、ここで幸之助さんの哲学を活かせるなら、と思っていましたが、数社に限定すると公共性が失われるとの方針から、従来の予定どおりになってしまいました。

その結果は案の定、予定の半分の 50 億円しか集まらなかった。もし幸之助さんのいうとおりにしていたら、たぶん 100 億円集まっていたでしょう。

政界、財界、官界、学界、すべてにおいて巨匠といわれる人がいない時代にあって、幸之助さんの思想は、まことありがたい。日本の思想家というと、福沢諭吉以来、西欧文化を吸収するのが普通で、西欧文化が語れなければ思想家にあらず、といった観があります。が、幸之助さんにはそれがまったくない。丁稚奉公から苦勞してきた生い立ちそのままです。日本の伝統のうえに成り立つ文化性がある思想といってもいいでしょう。

それゆえ幸之助さんの指摘、思想は、いまでも私の仕事に大きな影響を及ぼしつづけているのでしょう。❖

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

「松下幸之助に叱られた—今は亡き「経営の達人」が垣間見せた厳しさと優しさ」／『VOICE NO.200』

1994 年 8 月、(株) PHP 研究所

資料番号：199408001

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199408001&sub=>

国籍や年齢などを越えた知的交流—情報のネットワークをめぐって—

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

マルチメディアによるネットワーク化に関する議論が、少しずつ現実味をもって交わされるようになってきました。ハード面での技術開発の可能性やネットワーク展開、およびそれと表裏一体となるソフト面での質や内容の充実などが、さまざまな角度から語られはじめています。しかし、そうした議論と並んで、私が忘れてならないと思っていることは、情報化社会というものを成立させる基盤は、ひとりひとりの個人の感性と知性のはたらきによるものだということ、もっとしっかり思解しておかなければならないのではないかと、という点です。

情報交換ということの原点は、電話の場合がいちばん具体的で分かりやすいのですが、あくまでも一対一の関係が基本であって、これを複雑に組み合わせたものをネットワークと呼んでいるにすぎません。個人と個人が、地域や国籍、年齢、性別、職業そのほかさまざまな垣根を乗り越えて、一対一で結ばれているということに重要な意味があると、私はかねがね考えています。

いいかえれば、個人としての一対一の関係のなかで、いかに相手を知るか、また、いかに自分の考え方や感じ方を相手に向かって伝達できるかということが、情報化社会における個人の在り方として、とても大切になってくるということです。それは、情報を受け取り、また発信する個人の立場をしっかりとものにしないで、おびただしい量の情報があふれかえる大海の波と渦に呑み込まれてしまうことになりかねませんよ、ということでもあります。

ところが、現代の若者たちをみていると、一人一人がそれぞれの個人の文化として多様化、多元化する方向へ進んでいくことを望みたいけれども、私にはどうも情報や流行に流されていたずらに“多変化”しているだけというように感じられるのですが、皆さんはどうお感じでしょうか。

ともあれ、私たちは今後、いや応なくさまざまな情報、ネットワークの交錯する社会で生きていくことになります。個人も、また企業も、多様な情報源との対応を通して、地球規模での国際的な価値観のせめぎ合いの場に出ていかなければなりません。そこで日頃から心しておかなければならないと思うのは、個人の顔が見えない発信者にならないこと。また、みんなで一緒に価値観を共有し合うというのではなく、価値観が異なることをお互いに認めあうことが出発点なのだと、いうことをしっかり自覚することが大事だと、私は考えています。

私が口にして一社員一文化という考え方も、こうした情報化社会の流れにのっとったものであることは、言うまでもありません。企業がこれからの時代を生きていくには、情報ネットワークを通じた社員個々人の知的交流を、どこまで活性化できるかどうかということが、大きくものをいってくるのではないのでしょうか。✧

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

「研究所のコーヒープレイク」／『代理店ニュース TOKIO 倶楽部 NO.482』1994年11月、東京海上火災保険（株）

資料番号：199411006

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199411006&sub=>

わたしの楽観主義—プラス志向をめぐって—

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

私は大正 12 年の関東大震災の年に生まれており、また大学を出るときは、第二次大戦によって廃墟となった東京ということで、その生い立ちにおいて常に逆境にたたされてきた、という感じがつきまとっています。ですから、どんなことをしてでも将来を明るく見たいという願望が、人一倍強いといってもよいでしょうね。そうした個人史の部分と、社会へ出てからずっと、日本の国土のあるべき姿を考える仕事に携わってきたことが重なって、少しでもよいところを見つけ出して楽観のタネを育てていくということが、私の思考について回るようになってしまいました。もっとも楽観的な見方を口にするためには、それだけの材料と論理が必要なわけで、私自身にとっては実は悪戦苦闘の連続だった、というのが実感ですね。

誰かも言っていますが、楽観的に考えることは悲観的に考えるよりもはるかに難しいことです。また、批評家的に悲観論で分析や論評をすると知的なレベルが高いようにとられる場合が多いのですが、実はマイナス面の指摘をすることよりも、プラス面の発見をすることのほうが何倍も大変なことです。

しかし、さすがの楽観主義の私も、20 年後の日本を構想するプランナーとしての仕事を始めた当初、日本にはまだ車が 20 万台くらいしかなかったころでしたが、それが今日のような国に発展するとはとても想像できませんでしたね。当時、日本の車を 1000 万台にするといったら物笑いの種になりまして、大風呂敷もいいかげんにしろといわれたのですが、それが今や 3000 万台に達する勢いです。ただただ、あきれるばかりとしかいいようがありません。

私の楽観主義の基本にあるのは、人間への信頼と共感だと思います。人間には、誰にだって向上心というものがあります。どういうテーマを向上の目標にするかは、人によってさまざまですが…。また、人間は知恵をだしたり、工夫をしたり、新しく創造したりする能力がある。想像力をはたらかせることができる。そしてお互いに協調しあって社会生活をすすめていこうとする、思いやりの精神がある。これほどの素晴らしい可能性を持つ人間に対して、未来を悲観的に考えることなどできませんよね。

ただここで申しあげておきたいのは、楽観主義と夢想主義とは似ても似つかぬものですし、また問題を先送りにしたり目先の甘言を弄するのは、単なる安易主義、便宜主義に過ぎません。これに対して、きちんと現実を直視し、そこからプラスの要素をとり出していくのが楽観主義だといってよいと思います。そのうえで 10 年、20 年先を長い目で見る姿勢が必要なのではないのでしょうか。例えば中国の人は、100 年後のことをまるで明日のことのようには話すので驚かされます。日本で森を造るといって、すぐに緑化 5 カ年計画などという話になりますが、中国では 100 年、200 年後の森をどうするかという議論になります。大いに考えさせられますね。❖

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

「研究所のコーヒープレイク」、『代理店ニュース TOKIO 倶楽部 NO.483』、1994 年 12 月、東京海上火災保険（株）

資料番号：199412002

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199412002&sub=>

日本のデザインを考える

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

一人の人間が何かをデザインすることは、自分の「企み」を表現することであり、そして、その意図が社会に出て行く時は喧嘩あるのみで、勝つことが重要な勝負です。人間社会は因果関係の繰返しで、因が因を呼び因を作るのがデザインの言葉の意味です。私が国土へ取組む時はいつもそう思いますし、阪神大震災の問題もそう思います。しかし人間の一つの悪企みが社会を支配してしまうほど社会は脆弱ではないので、結果が惨憺たるものに終ることが私にとっては普通なのです。最近シリコンパレーで「プランテーション型の森が、熱帯雨林型の森に代ったことによって、シリコンパレーは再び息をついて来た」という言い方が流行って来ました。同じように一人一人のデザイナーが自分の意図を持ちながら、結果として熱帯雨林が出来てしまうということは物凄く素晴らしいことではないかと思うのです。

21 世紀を前に多くの人々が「20 世紀型の専門を生きしながら 21 世紀の一」と言いますが、私はむしろ「20 世紀の我々の専門は捨てましょう、完全否定しましょう」ということが議論になり、一人一人が自分の専門を否定する発言をすることに、とても意味があると思うのです。自己否定した所から何が生まれるかです。今日の社会で問題提起だけなら誰にでも出来るのです。

阪神の地震で何をどうしたらいいかというのは一つの専門からはほとんど答えは出ません。それではということで何の専門もない立場で一つの提案を強行しますと、立所に独裁的と非難されます。私自身は実はデザイナーというのは猛烈な独裁者でなければ、ほとんど社会的意味がない、専門的意味を持たない独裁者としてのデザイナーが日本を考えない限り、どうにもならないと考えているのです。しかし独裁者は必ず亡びることを知った上でのことです。

「専門を捨てる」と関連して、「20 世紀文明を否定する」議論を激しく行う必要があります。もはや、20 世紀文明が生み出したトラブルや副作用をいかに緩和するかを考えている時ではないというのが私にとってのテーマです。20 世紀文明の特色は「大都市文明」ですが、大都市を否定した文明はどんな文明であるかを考える。同時に人間の生活や思考の首根っ子を押えた形での科学技術文明、そして物質文明があります。人間生活が豊かになったのは確かですが、一方で核兵器問題一つ処理できないのです。さしあたって重要なのは精神文明であることは明白ですが、要するに 20 世紀文明を改善しようとか問題を繕おうとするよりは、完全否定をして 21 世紀文明を作ろうとした方が良いと言いたいのです。

私自身は、振り返ると我が人生は公共財でしかありませんでした。一度だけ企業の立場に立ってものを考えようと、現在の研究所に入りました。今日、経済は乱高下が自然体という前提の中で、企業が作り出すものは、買う人にとっての文化的な価値が問われています。文化的価値を創造出来ない企業は 21 世紀に成り立ちません。「一企業一文化」を築いた企業が生き延びると考えています。この日本デザイン機構に、ある奇妙な期待があってお話をしました。✧

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『VOICE OF DESIGN VOL.1』1996 年 1 月、日本デザイン機構 資料番号：199412002

資料情報：http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199412002&sub=

司馬さんの「土地公有論」を考える

—司馬さんが求めていたのは、“野人の公”ではなかったか—

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

公有化の「公」の意味

嶋中さん（嶋中鵬二・現中央公論社会長）のご紹介で最初に司馬さんにお目にかかったのは私がまだ国土庁の役人をしていた頃でした。司馬さんの「土地公有論」について確かめておきたいこともあり、私自身も列島改造後のバブルの後始末でいろいろ考えることもあり、そのへんを議論したいと思っていました。ところが最初ちょっと誤解がありまして、司馬さんは、私が土地公有化に反対としか受けとられなかったフシがありました。また、官僚と議論する機会も初めてじゃなかったのでしょうか。むしろ、私が公有化論を非現実的な議論だと説得しにかかったと、そう受けとられたようでした。

それがその後何度かお付き合いし、私が公有化論者だとわかってからは、少し議論の仕方を変えた。最初はとても公有化賛成などというお世辞は、司馬さんは信じようとしませんでした。それは当然かもしれません。私も役人の実務の立場で喋っていましたから。

それ以来のお話し合いですが、何が問題かという、司馬さんの「公有化」の「公」という意味が非常に問題なんです。

普通の人には「公有化」というと、国有化とまちがえたり、公共団体所有ということのを想像しますが、司馬さんの考え方はそうじゃないんですね。司馬さんの言う「公」とは、権力や行政じゃないんです。

で、日本の歴史は彼が言っているように、荒れた川を治めて土地をつくる、つくった土地は自分のもの、というように、開発が土地の所有を生むという構造に対しては、司馬さんは一貫して否定的な見方をされていたように思います。

それでは「国有化」ということを司馬さんが主張されていたかという、それはまったくないと思います。長年の友人であるぬやま・ひろしさんとの対談¹は出色ののですが、あれを読んでも、ぬやまさんはどちらかというと土地国有論者であるのに対し、司馬さんはまったくそれを考えてない。

それで、中国では土地に関して同じく国有という概念はないんですね。「集団所有」という新しい言葉をつくってしまったわけですが、実はその「集団」の中味はよく完成されたとは言えない。だから、共産党一党独裁の下で、土地の集団所有制と市場経済が今後どういうつながり持っていくかは、大変興味あるテーマだし、実は司馬さんと後年、大いに意見が一致したのもこのテーマでした。

野人の公と役人の公

「公」という概念が日本の歴史の中でもいろいろに使われていて、例えばつまらない例だと「公衆便所」とか「公衆電話」などという場合の「公」の使い方は、ちょっと面白い例だと思うの

¹ 対談集『土地と日本人』中公文庫所収「土地は公有にすべきもの」

です。しかし「公共事業」の「公」になると、不特定多数の人々のための行政の事業のような「公」になるし、江戸時代にはコミュニティの中に「公」があり、その「公」が幕府と戦ったというようなことも言われています。

そして司馬さんは私にくれた手紙の中で、自分は戦後一貫して「公」についてだけ書いてきたと。自分の書くものは「私」ではないと言っているんですね。そういう意味で、司馬さんの公有化の問題については、「公」とは何かという議論が必要なんでしょうね。

司馬さんという人は何か書いたとき、歴史上の人物は別として、最近の人を指すときは意識して個人名を使うことを避けておられたように思うのです。田中角栄さんのことについても、名前を挙げてというやり方はしなかったと思う。それはなぜかという、「私」ではなく「公」として扱いたかったから。ですから、彼の田中論というの、「私」のレベルからの議論ではないわけです。私のことにしてからが、「国土庁の人が」という言い方です。それはすでに「公」としての議論なんですね。

彼は私と話していていつでも言うのですが、お前は役人で、俺は野人だという区別を非常に重要視していましたね。それで役人を軽蔑しているのかというと、彼ぐらい役人を理解している人は少ないと思います。役人を非難するときは徹底的に非難しますが、役人の存在は否定しません。その意味では、司馬さんの官僚批判というのは、的を射たものでした。

いちばん最後に（平成 5 年）、司馬さんが首都移転調査会の委員になって、首都移転について熱っぽく語ってくださったことがあります。それはいわば千年の遷都論とでも言うべきもので、日本の歴史の中で、奈良、平安、鎌倉、江戸・明治と遷都を経験してきて、過去はすべて遷都に成功してきた。そして来るべき次の遷都が成功するかどうかの分かれ目は土地問題で、土地の公有化ということを考えないで首都移転してもそれは成功しないであろうというご指摘でした。

私はそれが基本だと思いましたので、司馬さんに、20 世紀末の首都移転に関する論文をぜひ書いていただきたい、そして 500 年後に司馬さんの 20 世紀末の首都移転論が話題になるということを企画したいと申し入れましたら、司馬さんはちょっと心を動かされて「いやあ、大変なことになったな...」と言われたので、そこに同席した人も私も、これは何とか実現できると思ったのです。そうしたらしばらくして、司馬さんから手紙が来て、あれはお断わりしたいと。何度か折衝したのですが、断わる決意は変わらないというので、とうとう書いてもらえないことになってしまったのです。

そのとき、司馬さんは二度にわたって私に手紙をくれて、その中で、なぜ自分は政府の調査会に参加したか、今では少し悔いている。こういう出すぎたことは野人である自分のすべきことではなかったと思い直している。自分は戦後、「公」について日本、あるいは日本人について



illustration by LUCY.

書いてきた。その延長線上にこの問題があるとは位置づけたくない、という意味のことをおっしゃっていました。私はある意味で感動しまして、それを押してまでこの企画をすすめようとは思わないと返事を出して、この件は終わりにしました。野人の公か役人の公かの区切りをつけたのでしょう。司馬さんはその後、調査会は欠席されたままでした。

過剰流動性と土地

そこで「公有化」の話に戻りますと、そういう司馬さん流の「公」を前提とした公有化の議論には、普通の土地問題の専門家は馴染まないものですから、例えば松下幸之助さんなども、先の対談集の中では、司馬さんの土地問題に対する警告に共感を示しつつも、やはり基本のところ、土地は有限の私有財産であるという認識。つまり、「公」という概念で土地を見るということとはされていない。

もともと、司馬さんご自身の「公」という概念を土地に当てはめた定義は、かならずしも明快というわけではないのですが、司馬さんの「土地公有」の議論は、財産権や所有権にかかわるテーマではないんですね。言ってみれば、皆の土地の利用の公的な性格をどう制度化したらいいかというのが、司馬さんがいちばん言いたかった点ではないでしょうか。別の言い方をすれば、現行憲法の私有財産制の下で、公有化というテーマを彼は取り上げたかったのではないのでしょうか。

政治家の中でも、例えば宮沢喜一元総理は、所有権は現行憲法で認められているものであり、それはそのままにするにしても利用権だけは公的な性格を持たせてはどうかという意見を出されています。また、自民党の中でも、むしろ保守的な元老格の人ほど、土地を商品として扱うことに警戒的でした。私が国土利用法をつくったときの瀬戸山三男建設相などは、そういう考え方の人でした。その意味では、むしろ野党のほうが、土地所有に関して、零細な私有財産権を守るということで、公有化には反対でした。

戦後の日本の土地について言うと、司馬さんはあの本の中でも述べておられるけれども、農地解放は、私有財産として土地を細分化する方向に動いた。しかし、封建的大地主制がいいとも思われないわけで、そのあたりから「農地って何だ」という議論が出てきて、それに対する答えというのは、明確には出ていませんね。私が農業法人化で個人所有を否定すると言ったとき、司馬さんは「うんうん」と言うだけで、否定も肯定もされなかったように思います。

また住宅政策にしても、持ち家比率が戦前の3割から戦後7割になったときに、すでに零細土地所有というのは始まっていた。しかも、相続税を厳しくしたことによって、零細土地所有にますます拍車がかかる。そういう意味では、私有財産権というのが確立してしまったのが今日の姿なんですね。そこへバブルが来たために、不動産屋や地上げ屋さんが零細化に対応した。

で、面白いのは、池田内閣の所得倍增政策の成功の段階で、朝日新聞の笠信太郎さんが『“花見酒”の経済』という本を書いて、ちょうど司馬さんが批判していると同じような現象を、花見酒のやりとりに譬えて批判している。司馬さんのように「公有化で」という結論は出していないが、これを放置しておくは大変だという認識では一致している。

司馬さんは、列島改造の田中内閣と土地問題というあたりで「公有化」を主張され始めて、このままでは政治も経済も社会もダメになると。

それで今度のバブルが3回目なんですね。3回目の今度は、インテリジェントビルから始まったバブルが崩壊して、とうとう住専問題まで来てしまった。しかし、これに対して司馬さんはあまり語っていないですね。それは「公有化」という基本のところの問題を提起して、そこで国の将来を憂えることになったのかなあと私は思うのですね。

3回同じことを繰り返したというのが私には興味ある問題で、3回繰り返す条件というのは、ひょっとしたら土地問題ではないのではないかと私には思えてくるのです。

つまり、過剰流動性とか金融ということが、3回問題をつくり上げてきた共通項ではないのかと。資本主義とか市場経済というのは、たまに起きる過剰流動性は避けられないことです。その過剰流動性が、経済全体のインフレも招かず、社会混乱も招かなかったのは、過剰流動性が全部土地へ吸収されたことがよかった。吸収された土地のほうは大混乱だけれども、経済や生活のほうは、土地を買うとかそういうことに関係のない人は、無キズで済まされた。そう考えることができるのではないかと。

ですから、もう一度、4回目の過剰流動性が起きたら、どうなるか。痛みを覚えた土地が過剰流動性を吸収してくれないことになると、どういう事態が起こるかは大事な論点です。ひょっとすると、猛烈なインフレが起こるかもしれない。そして高齢者の生活を直撃するかもしれない。それは社会的に大きな被害ですね。

ですから、過剰流動性の問題と土地への資金還流という問題は、住専問題が片付いたら一度冷静に議論し直すべきテーマかもしれません。日銀や大蔵省がいかに有能であっても、過剰流動性が生まれえないという保証はありません。そのあたりは、実は司馬さんと議論してみたかった点です。

土地問題の新しい歴史

歴史の流れとして、江戸時代、幕藩体制から明治になり、戦後になりという土地制度の流れを見てみると、いま確実に法人化の道を歩いていると言っていると思います。土地所有の形態が法人化する時代で、個人所有を否定し始めると思うのです。

マンションにしても、現在のような区分所有という形で財産相続を考えることがどこまで現実的か。むしろ法人格が管理するという考えがいいように思います。農地でも法人化、山林でも法人、法人ということで制度化すると、土地問題の一つの新しい歴史が始まると思うのです。それで法人化が限界にきたときに、司馬さんが言う公的所有権というのがもう一度議論になると思うのです。

バブルという形で法人化がちょっとつまづいた現在、法人化と言っても今は社会受けはしませんが、少し落ち着いてきたら、再び法人化の道をどうつくり上げるかというテーマになるのではないのでしょうか。そのとき、司馬さん流の公有化論が再び注目されるはずですよ。❖

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『中央公論 VOL.11 NO.11 臨時増刊 司馬遼太郎の登壇』1996年9月1日、中央公論社

資料番号：199609001

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199609001&sub=>

光齡化社会

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

サラリーマンには定年制度がある—

定年を迎えると、それまでの日々とは全く違った生活が始まります。

新しい職業に就く人や趣味にいそしむ人など選択肢はさまざまですが、ときに目的を失ってしまい、サラリーマン時代を回顧し「自分は燃えつきたのだなあ…」とガックリうなだれる人もいます。しかし、人生が終わってしまったわけではありません。

燃えつきたと思う前に、冷静に考えてほしいのです。それは誰が決めたボーダーラインなのか。本人は「まだいける」と思っているのに、本人の意志とは関係なく世の中には「制度的老化」が用意されているような気がします。

私自身も 70 歳を迎えたときに区役所から丁重な挨拶状が届き、「おや、もう老人扱いされているのか」と少なからずショックを受けたものでした。私は、定年制度や役所からの慰労の挨拶状を否定したいわけではありません。「人生のリタイヤは、周囲に決めてもらうものではなく、自分自身で決めること」との思いを申し上げたいのです。

私は、昨日よりも今日が、今日よりも明日が、より輝いていたいという気持ちで毎日を暮らしています。だから、死ぬときが人生で最も輝いているときだと信じています。

運動能力が衰えることは否めません。しかし、年齢を重ねるということは別の能力が向上していくという側面もあります。私は最近、アフター5 や土・日曜日に 20 代から 30 代の人たちとよく会い、談笑し、情報交換をするのが楽しくてしょうがありません。彼らは、私の話をまるで不思議なドラマでも体験するような顔をして耳を傾けます。そして私も、彼らの言葉に新鮮な驚きや発見をします。

「自分とは違う世代が何を考えているのか」をマスコミなどの情報ソースばかりではなく、直接交流のなかから直に感じ取り、価値観の変化や流行している商品や現象について、どのような背景や理由をもっているのかを考えることができるのです。そこはイキイキとした情報交流の場なのです。

私の活力源のひとつは、こうした若い人たちとの交流にあるのではないかと思うことがあります。

日本は、やがてこれまで経験したことのない高齢化社会を迎えます。



illustration by LUCY.

高齢化…この言葉をどうも暗いイメージで捉える方が多いようです。

歳をとるということは、そんなにも暗いことなののでしょうか。高齢化社会を迎えるということは、社会全体が沈んでしまうことなののでしょうか。

かつて「隠居」という言葉がよく使われていたことがありましたが、その時代では老人の知恵が重宝されていました。その頃の老人は「あなたは今日から老人ですよ」と誰かに決められてしまうのではなく、自ら定年の準備を立てて「私は今日から隠居しますよ」と周辺の人々に宣言したものです。

社会的に用なしの身分になるのではなく、「ご隠居さん」として地域住民の知恵袋や人々との仲介役などを務めていました。ご隠居と呼ばれた老人たちは、地域社会になくてはならない人だったのです。さらに、教養を高めるためにご隠居さんたちは茶道や句作などの趣味を持ち、生涯学習を実践していたのです。この老人の社会参加を現代風にいうなら、ボランティアといえましょうか。暗く捉えられがちな「高齢化社会」を明るい社会とするためのカギのひとつは、このボランティアにあると思います。

以前、九州の小学校で、地域のお年寄りに「子どもたちの先生」になっていただくという試みを企画、実践したことがありました。核家族化の進む時代にあって、普段はおじいちゃん、おばあちゃんに接する機会が少なくなっていた子どもたちは、人生の大先輩たちの語る経験談や地域の歴史、民話に目を輝かせて教壇を見つめていました。

教壇に立ったお年寄りたちは、「今回はどんな話を聞かせようか」と子どもたちと同じように生き生きと、目を輝かせていました。これがボランティアの効果の一例です。

本来、老人の「老」は、中国では「老師」「老酒」など「熟練した」とか「優れた」という意味で用いられる尊敬を表す文字です。とすると「老人」になるとは、「尊敬される優れた人」になるということなのです。

いまだかつて世界のどの国も経験したことがない急激な高齢化を迎える日本社会は、「光齢化社会」として未来に輝いてほしいものです。❖

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『TELISMAN NO.24』1997年3月、東京海上火災保険（株）

資料番号：199703003

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199703003&sub=>

私の考える人口問題

下河辺淳（東京海上研究所理事長）

岡崎先生から人口学の専門的なお話を伺いましたので、私は人口問題の専門家でも学者でもない素人が思ったことをお話しいたします。

私のような素人からみると、人口学は統計に頼ることにその特色があると言ってよいと思います。私のところにも人口関係の統計資料が多く送られてきますが、これらのデータの中にはどうみればいいのかわからないものもたくさんある、というのが本音です。

日本の人口問題は「高齢化」「少子化」と言われていますが、この言葉は一体何を意味するのでしょうか。高齢者の割合が増えれば「高齢化」、子どもの割合が減ると「少子化」ということだけを意味するのであれば、わたしもほっとするのですが、それ以上に、社会的意味につながる議論になると、相当な疑問を感じます。というのは、「高齢者」といったって、いろいろの人がいます。20代よりよっぽど元気な高齢者がたくさんいるのですから、一概に高齢者が増えるといっても世の中はどうかかわからないのじゃないかという気分になってしまいます。

日本人の高学歴化

今後の社会でもうひとつ議論しなければならないのは、日本人が高学歴になったということです。高等学校への進学率が95%、そのうちの半分はさらに大学・短大・専門学校に進学し、高等教育を受けます。20～30年経つと、日本社会は高学歴の人たちによって占められてきます。この変化は確実に約束された大変な出来事です。人々の多くが小学校しか出ておらず、農業社会の中で働き続けてきた明治初期と違い、ほとんどの人が高等教育を受けて、知識を通じて職業をもち、所得を得る時代になるということは、人類の歴史にとって大変なことです。今後人口が減少し、近い将来1億人まで規模が確実に縮小するときに、高学歴者が圧倒的なシェアになるということは、日本人口の大きな特性ではないかと思います。



illustration by LUCY.

人口問題の中心は「有病率」に

さらに、非常に高度な知識をもった社会では、人々は高カロリーな食事をとり、冷暖房による快適な環境に住み、歩く代わりに車や電車に乗る、このような生活をしますから、「運動不足」「過剰エネルギー」「高い知識水準」という人間像が、日本人口の特色となります。

私は、今後の日本の人口問題の一番大きいテーマは、「病気」との関わりになるのではないかと思います。病気しない人はほとんどいません。高齢化や少子化が進むに従って、有病率が激しく上昇していき、重い病気から軽い病気まで「有病率」が、人口問題の中心的話題になりそうだと考えています。

ちょっと余計なことを言うと、就職の際などに提出を求められる履歴書は、現住所、生年月日、家族関係など、アイデンティティを説明していますが、私は、人にとっては、病歴の方がはるかにその人を表すのではないかと思います。どんな病気にかかったことがあるか、どんな薬をのんだか、どんなワクチンを使ったか、その後はどうであったかなど、いわゆる個人の病歴が非常に重要であると思っています。

それを社会化して考えてみると 0～3 歳は、人間の脳の発育に決定的に重要な期間です。この間の医学的履歴を残していないというのは、親として無責任になると思います。それから、小学校・中学校と義務教育期間の記録も大切ですが、18 歳という、人間が非常に発展するこの時期の医学的記録をとどめないというのは無責任ではないでしょうか。18 歳人口の医学的履歴を残すことができれば、18 歳人口の社会的犯罪に対応しやすくなるのではないかと思います。もちろん、それらの記録の取り扱いに注意することは言うまでもありません。

総人口の減少

日本の人口は今後減少していくので大変だと、議論されています。しかし、日本の長い歴史を振り返ってみると、20 世紀における人口増加は、異常であったような気がしています。戦国時代と明治維新の人口増加も異常とみたほうがいいのではないかと思います。私は、日本の人口が 1 億に減少しても、さほど問題ではないと思っています。

ところで、国レベルでは人口減少が議論されていますが、東京都の未来についてはあまり議論されていません。都知事は将来も現在の規模を維持すると言っているようですが、日本の総人口が 1 億に減少するとき、果たして東京都だけが人口を維持できるのでしょうか。特に都心区の常在人口は将来的には減り、そこに働きに来る、あるいは観光に来るなどの「移動型」の人口によって形成されるようになるのではないかと思います。私は大変興味を持っています。

少子化

少子化社会は問題であるといっても、若い人たちがいなくなってしまうわけではありません。確かに、高度成長期の日本の産業構造は、若年労働力を頼みとしていました。今後、少子化による若年労働力の不足を、高齢者の労働力を活用して補っていかうとするのであれば、産業構造を高齢化社会に社会に対応するように切り替えていく知恵が必要になります。反対に、世界から若者を集めてきて、従来型の経済構造を維持したいという意見も少数あります。私は、高齢者に対応した産業構造のほうがずっと魅力的であると思っています。

若者の数が減ることは社会的に問題ではありますが、それよりは一人ひとりの青年の生き方の問題のほうがずっと大きいと、私は思います。

人生は四苦八苦

最後に言いたいのは、「四苦八苦」です。「四苦」を知っている人は多いと思いますが、八苦まで知っている人は少ないでしょう。四苦は、「生」「老」「病」「死」のことです。これに、「愛別離苦」（家族や愛する人と別れる苦しみ）、「怨憎会苦」（嫌な人と出会い心身に不快感を受ける苦しみ）、「求不得苦」（いくら努力しても求めても欲しい物が手に入れない苦しみ）、「五陰盛苦」（五つの陰から生じる本能的欲求の苦しみ）を加えて八苦です。私は特に五陰に非常に興味があります。五陰とは色（肉体）、受（物事に対する感じ方や受け止め方）、想（思い巡らすこと）、行（行動）、識（経験・知識）です。これら人間がストレスを感じる材料を並べているのはすばらしいことだと思います。

四苦八苦しながら生きていくのが人間です。四苦八苦の中で苦しみながら成長し、死ぬ日に自分の人生はよかったと言える人間になっていたら、最高の幸せなのではないでしょうか。

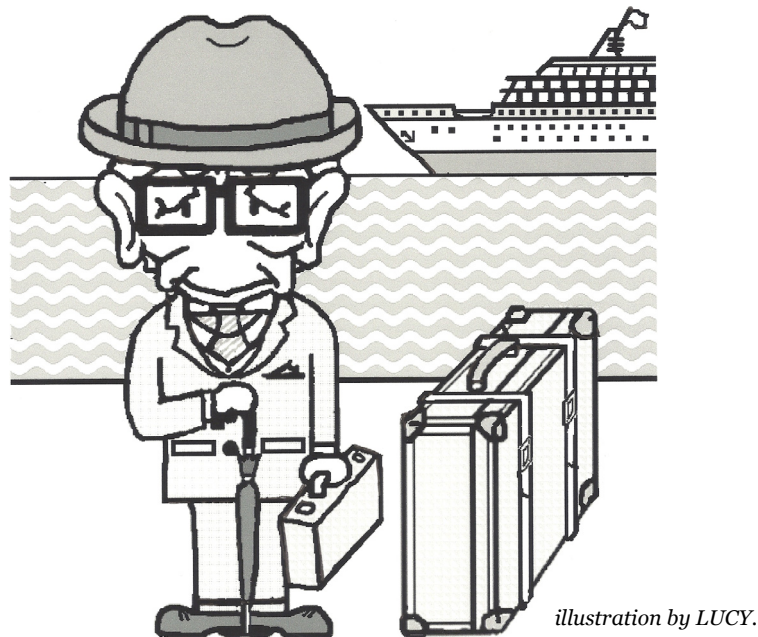
私のような凡人は、80歳になってまで朝から晩まで、四苦八苦でばたばたして暮らしていますが、逆に四苦八苦がなくなったら生きている意味がないと思っています。✦

【下河辺淳アーカイヴス所蔵】

『TELISMAN NO.24』1997年3月、東京海上火災保険（株）

資料番号：199703003

資料情報：<http://www.ued.or.jp/shimokobe/result.php?id=199703003&sub=>



「下河辺淳アーカイヴス」について

島津千登世（アーキビスト）

「下河辺淳アーカイヴス」は、2008〔平成 20〕年 1 月、一般財団法人日本開発構想研究所（開構研）に開設された。その開設に至る経緯、ならびに本アーカイヴスの概要について、改めて本稿に取りまとめることとしたい。

「下河辺淳アーカイヴス」開設の経緯

下河辺淳氏の著作あるいは関連資料の収集・整理のスタートは、下河辺氏が総合研究開発機構（NIRA）理事長在職当時の 1986〔昭和 61〕年にさかのぼる。機構内の部内組織としてインフォメーションセンターが設置されたことを機に、理事長の活動の記録と保存を目的に作業が開始された。その成果として、1987〔昭和 62〕年に『下河辺淳 文献目録』（収録点数：約 1000 点）、1994〔平成 6〕年に『下河辺淳 文献目録』（収録点数：約 1600 点）、1996〔平成 8〕年に『文献目録 下河辺淳』（収録点数：約 1900 点）がそれぞれ作成されている。

1991〔平成 3〕年 11 月に下河辺氏が理事長を退任し、1994〔平成 6〕年に NIRA が新宿から恵比寿に移転することに伴い、資料はいったん分散し、財団法人社会開発総合研究所や東京海上研究所あるいは自宅等にて保管されていた。その後 2000〔平成 12〕年ごろに社会開発構想研究所に集約され、下河辺氏が代表理事を務めていた国土政策機構に在籍していた渡辺知美氏が資料整理を担当されていた。

筆者が整理に携わったのは同年秋ごろからで、NIRA 時代に作成された上述の文献目録ならびに手書きの書誌情報カードと現物資料との照合作業を行うとともに、新たに追加された資料については都度カードを作成するという段取りで作業を進めた。

2001〔平成 13〕年 11 月に NIRA の正式プロジェクトとして「下河辺淳デジタル・アーカイヴ」が理事会で承認されたことを受け、筆者が所属していた政策研究情報センターが所管することとなった。下河辺氏と正式に寄贈契約を取り交わし、資料は社会開発構想研究所から NIRA へと移送された。その後の整理作業の過程で、下河辺氏が暫定的に設定・分類したテーマを練り直して新たに 22 項目の分野分類を設定し、年代、役職、資料形態、発表方法といったデータも追加するとともに、書誌情報を手書きのカードからパソコン上にデータ入力する作業等も行っている。

こうして 2002〔平成 14〕年 7 月、NIRA に付置されていた専門図書館「大来記念政策研究情報館」の特別コレクションとして「下河辺淳アーカイヴ」を開設。ホームページ上においてその書誌情報を公開するに至った（登録点数：2465 点）。その後も下河辺氏からは継続的に資料が寄贈されるため、その整理・登録作業を鋭意進め、登録点数は 2003〔平成 15〕年 10 月に 5016 点、2004〔平成 16〕年 8 月には 6473 点、2005〔平成 17〕年 4 月には 6632 点となった。同時並行してホームページを全面リニューアルするとともに、資料検索システムを構築し、館内端末に導入した。

2007〔平成 19〕年 8 月の総合研究開発機構法廃止に伴い、NIRA は同年 11 月に財団法人化することが決定され、アーカイブを公開していた政策研究情報館も閉館することとなった。資料の移管先について下河辺氏とも相談し、NIRA 内でもさまざまな検討を重ねていた。

その過程で、開構研と下河辺氏との間で資料の保管管理についての話がまとまり、同年 12 月に贈与契約を取り交わすこととなった。この間資料は民間の倉庫会社に預け入れていたが、本契約をもって正式に開構研に移管され、2008〔平成 20〕年 1 月に「下河辺淳アーカイブス」を開設し現在に至っている。

また、下河辺氏は経済企画庁や国土庁に在職していた時代の資料を、「国土計画行政に資するため」として財団法人国土技術研究センター（現・一般財団法人国土技術研究センター）に移管していた。これらの資料もアーカイブスとして一体的に管理することが望ましいとの下河辺氏の意向をふまえ、同財団関係各位の同意を得て開構研に再移管された。これを受けて、同資料の整理、目録作成、データベース検索システムの構築を進め、2013〔平成 23〕年 6 月に「戦後国土計画関連資料アーカイブス」（以下、戦後国土アーカイブス）として開設した。詳細についてはアーカイブスレポート Vol.9「戦後国土計画関連資料アーカイブスの開設」を参照されたい。

さらに、このほかに「沖縄関係資料」が存在していた。当該資料は 1996〔平成 8〕年の沖縄県の普天間基地返還に関する日米合意に際して、こう着状態となっていた政府と沖縄県の双方から要請を受け、下河辺氏がその調整役を担ったときのものである。「沖縄のために役立ててほしい」という氏の意向を踏まえ、さまざまな関係者の協力を得ながら、2016〔平成 28〕年 6 月に沖縄県公文書館に寄贈し、2017〔平成 29〕年 5 月より同館にて公開されている。その経緯については、アーカイブスレポート Vol.10「下河辺淳所蔵資料から見る『沖縄』」、Vol.12「下河辺淳の地方へのまなざし」に掲載の「Archives News」に取りまとめている。

所蔵資料の内容と分類項目

「下河辺淳アーカイブス」の所蔵資料は、大きく下記の内容に分類することができる。

- (1) 下河辺氏の著作物（原稿、論文、講演録、発言記録等）
- (2) 下河辺氏宛ての書簡・文書等
- (3) 下河辺氏の氏名の記載がある資料
- (4) 関連資料（下河辺氏の発言や氏名等の記載はないが、本人が整理・保管していた文献あるいは資料）

資料の分類にあたっては、①年代、②役職、③資料形態、④発表方法、⑤分野の 5 項目を設定し、データベース検索システムに反映させている。その内訳と登録点数の内訳は次のとおりである（45～46 ページ）。登録総数は 8349 点（2017 年 6 月 12 日現在）²であるが、このうち（4）関係資料（1106 点）については、下河辺氏に直接かかわるものではないため、①～④の項目の集計値からは省いた。

②役職については、複数記載されている場合に 2 つまで付与することとした。例えば、東京

² 総登録点数 8349 点のうち、下河辺氏に宛てた書簡や文書等の一部については閲覧ならびに書誌情報を非公開としており、公開点数は 8098 点となっている（2017 年 6 月 12 日現在）。

海上研究所理事長時代（1992〔平成4〕年4月～2001〔平成13〕年6月）には、阪神淡路復興委員長、国土審議会委員・会長、国会等移転審議会委員などを歴任しており、下河辺氏がどの立場で発言や執筆を求められていたかがわかる。

⑤分野については22項目を設定し、内容に即して1点ごとに2分野まで付与することとした。これは、下河辺氏の思想や発言が一分野に特定されることなく、多岐にわたることが多いため、利用者にできるだけ多くの資料に触れていただけるよう配慮したものである。

なお、③資料形態については、「戦後国土アーカイヴス」を構築する際に一部項目を改訂した。これは、双方のデータベース検索システム上で関連の書誌情報を相互に閲覧することを可能にするためである。

所蔵資料の特徴

①年代でみると「1990～1999年」の点数が多く、次いで「1980～1989年」であるが、これは史料収集が本格的に始まった時期がNIRA理事長就任以降であるため、それ以前の特に全国総合開発計画等国土計画・国土行政関連資料の多くは、「戦後国土アーカイヴス」に所蔵されている。

一方で、1940年代後半から1960年代にかけて、スラム街の研究（「零細工業地域の形態について」「トリゴエ町実態調査報告」「東京都下町零細商工業地区の『住い』について（鳥越地区の報告）」）、あるいは工業立地、新産業都市、新全国土総合開発計画といった分野における下河辺氏の著作（一部共著も含む）58点は、「下河辺淳アーカイヴス」で所蔵している。

2つのアーカイヴスの所蔵についてはそれぞれ下河辺氏本人が分類したもので、分類の明確な意図について記録はないが、「戦後国土アーカイヴス」については主に役所で作成された文書や報告書等が多く、本人の著作は少ないことから、「戦後国土アーカイヴス」は国土計画行政にかかる専門的な資料群とし、個人の記名の著作物と区別したと推測できる。

③資料形態でみると、「刊行物（新聞）」が41.4%、次いで「刊行物（機関紙／誌）」が17%となっている。「刊行物（新聞）」のうち5大紙（日経、朝日、読売、毎日、産経）で55%を占めるが、地方紙の割合も3割を超えている。下河辺氏の活動が全国に広がっていることを示すものと言えよう。

④発表方法では、「口頭発表」が31.4%で、「紹介記事（発言要旨を含む）」を合わせると46.4%となる。これは執筆という形態での著作が13.7%であることと比べて、下河辺氏の活動の特徴と言えるだろう。

⑤分野では、「地方都市・地域開発」が18.4%、「国際関係、世界、民族、宗教」が11.9%、「国土論、国土開発・計画」が9.3%、「政策、政治・行政」が8.9%となっている。

平面的あるいは便宜的な分類から見れば、表の内訳のとおりであるが、しかし下河辺氏の意図や着想、発意を含めて立体的に考えると、アーカイヴスの構造は複雑になる。全総計画のテーマで講演する際に高齢化社会やジェネレーション、人生における価値観にも思いを致し、国土を語るときには縄文時代からの日本の歴史にさかのぼり、水系や森林と人間の暮らしとのかかわりを説く。企業と文化をつなぎ合わせ、国際関係からシンクタンク論を展開する。人生80年70万時間構想から地域の将来像を、熱帯雨林の生態システムから次代の経済システムを提

言する。つまり、1 つひとつの分野を相互に関連させているのであり、これが本アーカイヴスの特徴であると言える。このコンテキストをいかに整理分類し、編集し、公開していくかがアーキビストに課せられた課題である。

①年代

年代	点数
1959 年以前	17
1960～69 年	152
1970～79 年	525
1980～89 年	2,142
1990～99 年	3,427
2000 年～	980
計	7,243

②役職（1 点につき 2 項目まで付与。総計は延べ数）

役 職	点数
戦災復興院、経済企画庁、建設省	406
国土庁（局長、事務次官、顧問等）	1,108
総合研究開発機構（理事長、顧問）	2,569
東京海上研究所（理事長、会長、顧問）	2,021
国土審議会（委員、会長）	547
国会等移転審議会（委員、調査部会長等）	201
阪神・淡路震災復興委員会（委員長）	648
下河辺研究室（会長）	143
その他	696
計	8,339

③資料形態

資料形態	点数
図書	333
刊行物（一般雑誌）	305
刊行物（機関紙／誌）	1,233
刊行物（新聞）	2,978
刊行物（行政資料等）	53
刊行物（研究報告書／記録集等）	433
刊行物（小冊子／パンフレット等）	154
刊行物（その他）	40
自筆メモ／構想メモ（下河辺淳氏）	223
原稿（下河辺淳氏）	364
書簡	399
シンポジウム・会議の記録・資料／企画書	355
行政資料等	2
写真／ビデオ／カセットテープ／CD・DVD	81
Web 掲載記事	240
その他	50
計	7,243

④発表方法

発表方法	件数
著作物（論文）	150
著作物（随想・小論）	268
著作物（書評）	7
著作物（その他）	569
口頭発表（講演）	737
口頭発表（パネルディスカッション）	212
口頭発表（座談会）	306
口頭発表（対談）	274
口頭発表（インタビュー）	353
口頭発表（談話）	99
口頭発表（委員会等）	175
口頭発表（講評）	2
口頭発表（あいさつ）	80
口頭発表（その他）	36
紹介記事（発言要旨を含む）	1,088
紹介記事（発言内容を含まない）	2,333
その他	554
計	7,243

⑤分野（1点につき2分野まで付与。総計は延べ数）

分 野	点数	分 野	点数
国土論、国土開発・計画	1,135	社会論、未来論、歴史・伝統	639
都市、首都、東京	718	価値観、ライフスタイル	144
地方・地方都市、地域開発	2,244	ジェネレーション、ジェンダー、家族	372
土地、建築、住宅	162	情報、メディア、ネットワーク	251
災害、防災	758	科学、技術	395
経済	195	文化、デザイン	175
企業、経営	195	生活全般	195
産業	183	シンクタンク	692
交通	204	政策、政治・行政	1,086
自然、環境、エネルギー	566	人物、人物評	311
国際関係、世界、民族、宗教	1,450	その他	111
計			12,181

「下河辺淳アーカイヴス」トップページ
<http://www.ued.or.jp/shimokobe/index.php>

検索結果表示画面

アーカイヴスのこれから

下河辺氏がアーカイヴスに関心を寄せるきっかけになったのは、慶応義塾大学文学教授・アートセンター所長を務めていた鷺見洋一氏の「アーカイヴとは何か」（慶應義塾大学 SFC フォーラム事務局『SFC フォーラム・ニュース』NO.49）という記事であったという。ここでは、鷺見氏が NIRA の研究広報誌『NIRA 政策研究』に寄せた論文『「下河辺淳アーカイヴ」の意義—個人記憶装置の可能性—』の一部をご紹介します³。

これは下河辺氏の収集した、いわゆる個人コレクションを扱うアーカイヴでもない。この特徴こそ、本アーカイヴが文化装置たるゆえんなのである。（中略）氏はいわゆる物書き一般と違って、自分の「著作」と呼べるものをあまり持たず、むしろ自分の多岐にわたる活動それ自体を「作品」として世に訴えてきた人物なのである。ここには「作品」と「作者」という概念の興味深い転倒現象がある。

そもそもわれわれには、因果関係に対する不思議な通念というか、信仰のようなものがあり、一個の人間（＝作者）が熟慮と推敲の果てに生み出すものだけが作品なのだと考えている。だが、現実はいさほど単純ではない。巨大化し、複雑の度を高めた文明社会で、個人が何かを無から「創造」し、ある「作品」の「作者」を名乗れるケースなど、ほとんどあり得ない幻想である。そうした状況を踏まえて、下河辺氏は全く独自の立場を示してきた。だれが「主人」でもなく、「作者」でもあり得ない社会をいち早く察知して、氏は「書き手」や「作者」という古い役柄を捨て、諸現象、諸思想の「デザイナー」として振舞っているからである。だれが何を生み出すわけでもなく、さまざまな声や意見や事象がただ大量に出現し、消費されている現代社会では、「デザイン」を知る者だけが真の賢者の肩書を約束されている。下河辺氏の数十年間にわたる多彩な履歴、すなわち政府の各省庁、NIRA、東京海上研究所などでさまざまなポストを経験されたという「デザイン史」が、いつの間にか戦後日本の歩んだ歴史をなぞらえてきているという象徴性からして、このアーカイヴは一個の「文化装置」なのである。「下河辺淳アーカイヴ」とは、単に下河辺淳なるたぐいまれな一個人を顕揚したり、その業績を記録するだけの「記憶集積装置」であるにとどまらず、氏の全業績・全事績がかかわる諸分野のあらゆる問題やあらゆる関係者にまで触手を伸ばしている、驚くべきネットワークの配信拠点としてとらえ返すことができるのである。

また下河辺氏は「下河辺淳アーカイヴ」開設記念講演会（2002〔平成 14〕年 7 月 11 日、日仏会館にて実施）⁴において、下記のように述べている。

世の中の公共的な動きには、「意図」と「結果」があります。だから、政府や行政が公共政策を講じようとするときに、どんな意図であったかということは大いに語り伝えておきたいし、また一般の方々にも勉強していただきたいと思います。

³ 鷺見洋一、NIRA 政策研究 Vol.17 No.9「次代への提唱—『下河辺淳アーカイヴ』から時代を読む」2004 年 9 月、総合研究開発機構〔下河辺淳アーカイヴス／資料番号：200409005〕

初出の「特別コレクションの意義と利用（2）下河辺淳アーカイヴの意義—個人記憶装置の可能性」、NIRA 政策研究 Vol.17 No.2『政策研究—情報の視座から拓く』「第 3 章 NIRA における政策研究情報」2004 年 2 月、総合研究開発機構）をリライトしたもの

⁴ 下河辺淳「下河辺淳『アーカイヴ』を語る—わが国の公共政策考察」、2002 年 7 月、総合研究開発機構〔下河辺淳アーカイヴス／資料番号：200207001〕

しかし、意図したからといってそのとおりになるという経験は、私には全然ありません。すばらしい意図があると自負しているのに、結果を見ると惨憺たるもので、反省材料として現実があるというような関係にあります。ですからアーカイヴというものを議論するときにも、この「意図」と「結果」が重要であって、「結果」だけを書棚に並べるということは、ほとんど意味がない。むしろ、「意図」を記録しておくことの意味が大きい。

もうひとつは、世の中に、誰の場合でも、「自由」と「計画」ということがあって、「まったく自由」な環境を必要としている一方で、何事も計画的でなければならない。この「自由」と「計画」について、アーカイヴでどのように調整していくかということも大切なことです。

しかも、自らのアーカイヴとして残す記録が、人権とか差別とか、いろいろな形で影響を与えるということについてどれだけの配慮をすべきかということとはとても大変なことで、例えば私が少数民族を語るとき、それは少数民族にとって何なのかということを、いつも恐れを抱きながら話すことになります。(中略)

私は役人でもありましたから、言えないこともありましたし、特定の企業を傷つけてはいけないという道徳心も残っています。ですから自分で自分のアーカイヴを見たときに、ちょっと抜けている点があります。しかし研究する側が摘発してくれるのを、私は待ちたいんですね。最近、歴代内閣との関係などについて若い新聞記者が取材にやってきます。そうして勉強してくれる記者がいるのはいいことです。帝国大学法学部東大主義の日本の経済社会を否定するというのが、田中内閣の政治的命題でしたが、それをやるのは大変でした。膨大な政治資金が要るにもかかわらず、経団連調達資金はゼロになりましたから。敵からはもらえないわけです。それで生み出したのが公共事業からのピンはねで、すばらしいアイデアだと思いますね。それを経団連が叩いた。汚職だって言ったのは財界側なんですよ。そういう歴史をもっとちゃんと記録すべきかもしれません。

そういう戦後の歴史を見る上でも、アーカイヴとしてのおもしろさがあります。私のアーカイヴで勉強してくれるような若者がいたら、ぜひ話し合いをしたいですし、私のアーカイヴを批判する論文を書いてくれる人が出てきてくれることを、いまでも期待しています。ほじくり返して、いろいろ非難してくれて、私が「なるほどなあ」と思えたら幸せですね。

1986 [昭和 61] 年 10 月から約 4 年半 NIRA に在籍していた筆者は、民間のシンクタンクへ転籍し、そののち 2000 [平成 12] 年 4 月から縁あって再び NIRA に籍を置くことになった。その際、当時東京海上研究所理事長であった下河辺氏に挨拶に行ったところ、資料の整理を依頼された。アーカイヴスの世界など門外漢であったが、「下河辺淳」という百科事典を編集するつもりで、以来この業務に取り組んできた。下河辺氏は、筆者のアーキビストとしての道筋を示唆し、その活動の幅を広げてくださった恩人である。

異彩のプランナーが残した多彩で多岐にわたる資料は、それぞれが縦横無尽なネットワークの構成要素でもある。整理途中の戦後国土計画関連資料、ならびに下河辺研究室閉室の際に寄贈いただいた資料の整理を鋭意進め、「下河辺淳アーカイヴス」のさらなる充実を目指したい。

「下河辺淳アーカイヴス」をデザインする一個人を超えたアーカイヴスが、「文化装置」として社会に貢献することができれば幸いである。❖

Archives News

—沖縄県公文書館で「下河辺文書」が公開されました—

一般財団法人日本開発構想研究所は、2016〔平成 28〕年 6 月 22 日、「下河辺淳沖縄関係資料」を沖縄県公文書館に寄贈しました。

同資料は、1996〔平成 8〕年の日米両政府による普天間基地返還合意に際し、下河辺氏が当時の橋本龍太郎内閣総理大臣、大田昌秀沖縄県知事より要請を受け、双方の調整役を担った時期の資料です。当時の内閣と沖縄県の意見を取り入れながら下河辺氏がまとめあげた「沖縄問題を解決するために（下河辺メモ）」「普天間基地問題について」「普天間基地の移転問題について」「総理の沖縄演説のポイントメモ」などの手書き原稿をはじめ、御厨貴氏（放送大学教授・東京大学先端科学技術研究センター客員教授）らによるオーラル・ヒストリー「沖縄問題同時検証プロジェクト」、江上能義氏（早稲田大学大学院教授）による「下河辺淳氏オーラル・ヒストリー」、また沖縄県庁等で作成された公文書や各種日程表のほか、当時官房長官を務めた梶山静六氏より下河辺氏に宛てた自筆の書簡など、貴重な資料が含まれています。

下河辺淳アーカイヴスでは、「沖縄のために役立ててほしい」という下河辺氏の意向をふまえ、資料を整理し目録を作成するとともに、沖縄県への移管を目指して関係各位のご協力のもと調整を進め、昨年寄贈の運びとなりました。

同資料は、2017〔平成 29〕年 5 月 31 日より「下河辺淳文書」として県公文書館にて公開されることとなりました。公開にあたり、仲本和彦資料公開班長は「行政機関のやりとりは公文書として残らないケースが多い」と指摘したうえで、本資料は調整過程の極めてまれな文書であるとともに、「県と政府が対立したり、歩み寄ったりした 1995～97 年の様子に、資料を通じてアクセスできる」としています（沖縄タイムス＋ニュース、2017 年 5 月 31 日）。

今回の公開にあたり、ご尽力いただいた県公文書館ならびに関係各位に感謝申し上げますとともに、本資料が広く県民活動や県政に寄与することを期待しています。✧

【Web 等掲載記事（2017 年 6 月 10 日現在）】

○琉球放送

<https://www.youtube.com/watch?v=pEySQPXMfbs>

○朝日新聞

<http://www.asahi.com/articles/ASK5Z7CY1K5ZTPOB007.html>

○琉球新報

<http://ryukyushimpo.jp/news/entry-505684.html>

○毎日新聞

<https://mainichi.jp/articles/20170531/rky/00m/040/004000c>

○沖縄タイムス

<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/99945>

（アーキビスト／島津千登世）

●「下河辺淳アーカイヴス」書誌閲覧について

＜公開時間＞

10 : 00 ~ 17 : 00

＜所在地＞

アーバン虎ノ門ビル7階

＜連絡先＞

TEL : 03-3504-1760

e-mail : shimokobe-arch@ued.or.jp



「下河辺淳アーカイヴス」では、下河辺淳氏が財団法人国土技術研究センターに寄託されていた国土計画・国土政策関連の資料、各種文献等について、下河辺氏の許諾を得るとともに、同センターのご厚意により当アーカイヴスに収蔵しました。今回収められた全国総合開発計画や首都機能移転問題、社会資本論など多岐にわたる資料群を広く皆様にご活用いただくため、公開に向けて順次整理を進めてまいりましたが、このたびその一部を公開することといたしました。

50

下河辺淳アーカイブス Archives Report バックナンバー

バック ナンバー	発行年月	タイトル	主な内容	版型／頁数
Vol.12	2016・06	下河辺淳の地方へのまなざし	鼎談「下河辺淳の地方へのまなざし～虫の目・鳥の目・魚の目」（榛村純一氏×辻一幸氏×戸沼幸市）	A4 版 46 頁
Vol.11	2015・06	震災復興～阪神・淡路大震災 20 年の教訓～	対談「震災復興～阪神・淡路大震災 20 年の教訓～」(五百旗頭真氏×御厨貴氏)／阪神・淡路復興委員会と下河辺氏(島津千登世)	A4 版 40 頁
Vol.10	2014・06	下河辺淳所蔵資料からみる「沖縄」	鼎談「沖縄県政と下河辺淳氏」(吉元政矩氏×坂ロー氏×上原勝則氏)／「沖縄問題同時検証プロジェクト」を振り返る(御厨貴氏)／「沖縄問題を解決するために(下河辺メモ)(江上能義氏)	A4 版 41 頁
Vol.9	2013・06	戦後国土計画関連資料アーカイブスの開設	戦後国土計画関連資料アーカイブスの開設にあたって(下河辺淳)／戦後国土計画関連資料アーカイブスについて(島津千登世)	A4 版 41 頁
Vol.8	2011・12	「頭脳なき国家」を超えて	対談「『頭脳なき国家』を超えて」(小川和久氏×下河辺淳)	A4 版 29 頁
Vol.7	2011・06	38 億年の生命誌—生きものとしての人間を考える	対談「38 億年の生命誌—生きものとしての人間を考える」(中村桂子氏×下河辺淳)	A4 版 25 頁
Vol.6	2010・12	日本経済—その来し方行く末—	鼎談「日本経済—その来し方行く末」(香西泰氏×小島明氏×下河辺淳)	A4 版 27 頁
Vol.5	2010・06	日本列島の未来	対談「日本列島の未来」(御厨貴氏×下河辺淳)	A4 版 35 頁
Vol.4	2010・03	水と人のかかわり	鼎談「水と人のかかわり—流域に生きる」(青山俊樹氏×定道成美氏×下河辺淳)	A4 版 27 頁
Vol.3	2009・11	クルマ社会の未来	対談「クルマ社会の未来」(志田慎太郎氏×下河辺淳)	A4 版 21 頁
Vol.2	2009・07	日本の食と農を考える	対談「日本の食と農を考える」(石毛直道氏×下河辺淳)	A4 版 21 頁
Vol.1	2009・03	21 世紀の日本とアメリカ	対談「21 世紀の日本とアメリカ」(山本正氏×下河辺淳)	A4 版 21 頁

※Vol.1「21 世紀の日本とアメリカ」を除き、若干の余部がございます。

ご希望の方は、一般財団法人日本開発構想研究所「下河辺淳アーカイブス」までご連絡下さい。

一般財団法人 日本開発構想研究所 復刊UEDレポート バックナンバー

発行年月	タイトル	主な内容	版型／頁数
2017・06	下河辺淳とその時代を語る～下河辺淳研究の勧め～	1 鼎談 1 対談 6 論文収録 [大西隆・栢原英郎・蓑原敬氏鼎談、今野修平氏、川上征雄氏、大内浩氏、後藤春彦・鈴木輝隆氏対談他]	A4 版 100 頁
2016・06	地方再生と土地利用計画―市町村による総合的な土地利用計画制度の提案―	1 会議録 6 論文収録 [土地利用計画制度研究会、梅田勝也氏、土屋俊幸氏、蓑原敬氏他]	A4 版 106 頁
2015・06	戦後 70 年の国土・地域計画の変遷と今後の課題	1 鼎談 7 論文収録 [今野修平・薦田隆成・川上征雄氏鼎談、北本政行氏、梅田勝也氏、橋本武氏他]	A4 版 95 頁
2014・06	土地利用計画制度の再構築に向けて―人口減少社会に対応した持続可能な土地利用を考える―	7 論文収録 [大村謙二郎氏、交告尚史氏、高鍋剛氏、梅田勝也氏、西澤明氏他]	A4 版 72 頁
2013・06	大学の国際化とグローバル人材の育成	5 論文収録 [吉崎誠氏、森田典正氏、南一誠氏、藤井敏信氏、角方正幸氏他]	A4 版 54 頁
2012・06	大震災後の国づくり、地域づくり	7 論文収録 [大和田哲生氏、橋本拓哉氏、中山高樹し、今野修平氏他]	A4 版 78 頁
2011・06	みちを切り拓くコミュニティの力	7 論文収録 [広井良典氏、巽和夫氏、村井忠政氏、檜谷恵美子氏、森反章氏他]	A4 版 68 頁
2010・07	地域経営	8 論文収録 [平松守彦氏、望月照彦氏、西尾正範氏、鈴木豊氏他]	A4 版 94 頁
2009・11	大都市遠郊外住宅地のエリアマネジメント	1 会議録 7 論文収録 [小林重敬氏、中城康彦氏、梅田勝也氏、佐竹五六氏他]	A4 版 94 頁
2009・03	ネットワーク社会の将来	1 対談 8 論文収録 [石井威望氏×戸沼幸市、斉藤諦淳氏、澤登信子氏、藤井敏信氏他]	A4 版 96 頁
2008・07	グローカル時代の地域戦略	1 対談 8 論文収録 [下河辺淳氏×戸沼幸市、大村虔一氏、石井喜三郎氏、今野修平氏他]	A4 版 88 頁
2008・01	諸外国の国土政策・都市政策	9 論文収録 [城所哲夫氏、片山健介氏、村上顕人氏、大木健一氏他]	A4 版 86 頁
2007・07	大学改革と都市・地域の再構築	10 論文収録 [天野郁夫氏、福井有氏、牧野暢男氏他]	A4 版 88 頁
2007・01	人口減少社会の研究―人口減少社会の将来像、国のかたち、地域のかたち	10 論文収録 [正岡寛司氏、坂田期雄氏、天野郁夫氏、今野修平氏他]	A4 版 74 頁

※2008・01 号「諸外国の国土政策・都市政策」、2011・06 号「みちを切り拓くコミュニティの力」を除き、若干の余部がございます。ご希望の方は、一般財団法人日本開発構想研究所総務室までご連絡下さい。



2017 [平成 29] 年 6 月発行

編集・発行

一般財団法人日本開発構想研究所 「下河辺淳アーカイヴス」

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-16-4 アーバン虎ノ門ビル 7F

電話 (03)3504-1760 ファクシミリ (03)3504-0752

e-mail : shimokobe-arch@ued.or.jp URL : <http://www.ued.or.jp/>